
異次元、そして

忠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異次元、そして

【Nコード】

N1145P

【作者名】

忠義

【あらすじ】

時は、1941年、永年に渡る欧米列強の差別をうけ、大日本帝国は開戦を決意する。そんな時、異常な台風が接近して、連合艦隊は異次元へと飛ばされる。そして、気づいた世界は……

扶桑皇国遣欧艦隊（前書き）

元ネタを知っている人は、少し、変な感じがするかもしれないので
ご了承ください。

作品自体はいいものに仕上げていきます。

時代背景と、少し違いかもしれませんが、そこは大目に見てください。
い。

扶桑皇国遣欧艦隊

コンコン

「開いてるぞ」

と、連合艦隊司令長官山本五十六は言った

「失礼いたします。軍令部からの命令書をお持ちしました。」

そう言つて、若い副官は山本に命令書を手渡した。それには以下のことが書いてあつた。

・帝國海軍ハ12月上旬ヲ期シ、米、英、蘭國ニ対シ宣戦布告ヲ行フ

・ソノ為ニ、連合艦隊ハ呉ニ寄港サセヨ

「ついに、来るべき時がきたか。できればこれだけは、避けたかつた。」

山本は嫌々ながらも承認せざるを得ない立場だつた。

それから数日後、連合艦隊艦艇は続々と呉に集結していった。

そして、旗艦大和にて、連合艦隊会議を行つていた。

「長官すみません」

と、あわてて会議室に入ってきた通信兵が言った。

「会議中だぞ、何事だ？」

「す、すみません。しかし、中国方面にて巨大な台風がものすごいスピードで急速接近中と、観測機から連絡がありました。」

そして、その台風が艦隊の真上に来た所で突然止まった。

ものすごい揺れで、皆パニックになっていた。そして、窓の外を見た参謀は

「窓の外の景色が、か、変わっていく。」

それから、皆が気を失った。

波の音で参謀達は目を覚まし始めた。

「ど、どうして波の音が？俺達は内地の呉にいたはずだろ？」

参謀達は驚きを隠せなかった。

だが、連合艦隊艦艇は全て無事であった。

「前方より不明艦数隻、中央に空母の艦隊、本艦に向かってきます。」

見張りの声に、双眼鏡を持っている参謀は前方を見た。そして、目を疑った。

「馬鹿な、あの中央の空母は、旗は違うけど赤城じゃないか」

「しかし、赤城は本艦の後方にいるんですよ。同型艦の天城は地震で壊れましたし」

だが、その答えが入ってきた。

「長官、前方の不明艦隊より入電あり」

「読め」

「我々は扶桑皇国第一遣欧艦隊旗艦赤城、貴艦隊の所属と目的を明らかにせよ」

「ふ、扶桑皇国だ！？、我々を馬鹿にしているのか？ふざけやがって、

地理に詳しくないとも思っているのか？」

皆が怒りの声をあげている。そして

「長官、再度入電です。貴艦隊の司令及び、副官数名を本艦へ移乗せよ

赤城艦長兼第一遣欧艦隊司令 杉田淳三郎」

これを受け、山本は少し笑みを浮かべて

「ふむ、少し会ってみるとするか」

この言葉に参謀達は驚いた。その中の一人の南雲は

「長官、我々は意味の分からない艦隊に降伏すると仰るのですか？」

これを聞いた山本は鋭い目になって

「私は会ってみると言ったのだ。それに、ここが何処だか分からん以上

戦うわけにはいくまい」

さすがの南雲もこれには反論することができない。山本の言っていることが正しいからだ。

「うわー、大きい船ですね坂本さん。あれは、なんて船ですか？」

と、甲板のモップ掛けをしていた少女は士官服をきた少佐の階級を付けた人に尋ねた。

「さあ？わからん、第一にこんな所で艦隊と合流なんて聞いていない。それと宮藤、手が止まっているぞ」

「すつすみません」

そう言うと少女は、モップ掛けを再開した。

扶桑皇国遣欧艦隊（後書き）

どうも、今回が初投稿になりました桜花です。これ書くだけで3時間も使いました。これから順次、連載をしていきたいので応援宜しくお願い。それと、中途半端で終わってしまって申し訳ありません。

初陣（前書き）

前回の続きです。アニメ的には、1期の2話をモデルにしています。

初陣

大和の内火艇で山本をはじめとする連合艦隊参謀が扶桑皇国と名乗る赤城に乗艦した。

見れば見るほど赤城と一緒にである。

「どういふことでしょうか長官？」

「さあね、分からないが乗り込むと決めた以上は何が起きても驚かないよう覚悟しておけ。」

山本は落ち着いた表情で言った。普段は、演技など嫌いだが、山本の内心は驚いていた。

内火艇は赤城の左舷に着けられた。

山本等参謀は、赤城へと移乗した。そして、待っていたのは日本海軍の制服を着て肩に大佐の階級章を付けた40代位の人と中佐の階級章を付けた30代位の人がいた。その二人は山本等が来ると敬礼をした。

山本等も皆、敬礼を返した。

「どうも、赤城の艦長の杉田淳三郎です。」

「赤城の副艦長の樽宮敬喜です。」

二人は名乗った。

「連合艦隊司令長官の山本五十六です。」

「では、どうぞこちらへ」

と、二人はミーティングルームへと山本等を案内した。

内部は、連合艦隊の方の赤城と全く一緒であった。

「どういふことでしょうか？長官」

小声で参謀等は聞いてきた。

「わからないが、とりあえず話だけでも聞いてみよう。それに、ここが何処か分かるかもしれないしな」

案内されたミーティングルームも全く一緒である。山本はしばらくの間、赤城の艦長もしたことがあるのですぐに分かった。

「貴艦隊の所属はどこかね、赤城そっくりの空母があるが、カールスラント海軍とは思えない。」

「カ、カールスラントって一体どんな国かね。そんな国は聞いたこともない」

参謀の言葉に杉田と樽宮は驚いた。山本は単刀直入に聞いた。

「ここは一体何処ですか？」

「インド洋を抜けて、アラビア海に入った辺りですが」

「アラビア海だと、そこは大英帝国の制海権のはずだぞ」

杉田はその言葉に対して

「大英帝国とはなんですか？さっぱり話がみえません」

「大英帝国を知らんとは何」

そこまで言って山本に止められた。

「実は杉田さん。我々は、アメリカへの開戦を決意して呉にて会議を行っておりました。そこへ突然、台風が来て気づいたらこの海域にいたんです。」

二人は驚いた表情で聞いていた。

「じゃあ、つまりあなた方は我々の時代、いや、この世界の人ではないと言いたいのかね」

「まだ、その答えは分かりません。」

そんな時に突然サイレンが鳴った。

「敵襲？」

参謀等は、突然のサイレンに慌てた。

「ネウロイ、急速接近中！。距離20000、高度3000」

その声を聞いて、二人は走り出した。山本等もそれについていく。

「ネウロイ、さらに接近！距離15000」

艦橋に居たものが杉田に報告をする

「全艦、対空戦闘用意！目標、前方のネウロイ、航空隊及び機械化航空歩兵は発艦準備」

聞きなれない単語に参謀は疑問を持つ。そんな中山本は、

「杉田さん、我々も戦闘に参加します。」

「助かります。なにせ、艦隊の数が少ないので宜しくお願いします。」

「わかりました、通信参謀、ただち艦隊に発光信号を」

「了解」

そう言って、艦橋から走っていった。

「艦長、航空部隊は発艦準備完了です」

「航空隊、発艦せよ」

山本は航空隊は、どんなものと見ようと窓の近くに行った。そして、驚いた。

なんと、甲板にいるのは、旧式の96式艦戦そっくりである。だが、

さらに驚いたのは、その前で待機している、少佐の階級章を付けた10代後半の女の人である。足に奇妙な物を履いていた。

「坂本美緒、発艦する。」

そう言うのと滑走を始めた。

「だめだ、あんなので飛べるわけがない」

参謀等は口々揃えて言う。だが、次の瞬間には、飛び上がった。次々と96式艦戦も発艦していく。

前方では、連合艦隊と、謎の黒く所々赤い斑点のある生き物？と戦っていた。だが、大和の主砲でもなかなか落とせなかった。そこに先ほど、発艦した坂本少佐と96式艦戦が来た。

「すごい主砲だ、40cmは越しているな。だが、コアまで威力が到達していない。」

坂本はそう言って、眼帯の下にある明るい紫色の目でネウロイを見渡す。コアをみつけて一気に急降下をかけた。

ダダダ、銃を撃つも、ビームが激しくなかなか近づくことが出来ずに再度上昇した。だが、96式は

ビームの餌食となって、火を噴きながら落ちていく。そんな時、赤城ではエレベーターが上がってくることに山本は気づいた。

またしても、さっきの人と同じ物を履いている今度は少女であった。そして、発艦していった。

「宮藤？」

坂本は驚いた。

「坂本さん、助けにきました。」

宮藤は機銃を持つと、坂本に渡そうとした。

「坂本さん、これを使ってください。」

「いや、それはお前が使え。」

宮藤は驚いたが、

「はい。」

そのころ戦艦大和は

「主砲、仰角修正。今度こそ落とせ。」

大和の主砲がネウロイに向けた。

「撃ー！。」

轟音と共に46cm砲弾がネウロイに向かっていく。そして、ネウロイに直撃した。

「す、凄いですね坂本さん。」

「ああ、少しはダメージを与えたか。宮藤、コアは敵の丁度中心辺

りにある、そこを狙え。」

そして、坂本は大和に近づき

「敵の中心を狙って1発撃ってくれ。」

大和の艦長は一瞬迷ったが

「主砲、敵の中心に向け！」

艦長の声が伝声管から第一、第二主砲に伝わる。すぐさま主砲が修正されて、

「撃ー！」

再び主砲が放たれた。見事にネウロイの中心に命中して、赤いコアがむき出しになる。

「今だ宮藤。」

「はい。」

宮藤はむき出しになったコアに向かって機銃を撃つ。コアが砕け、ネウロイ共々光る破片に変えた。

「よくやった宮藤。」

坂本は近くにいくが、宮藤は魔法力を使いきり気絶していた。

「全く。遣欧艦隊が無事だったから良かったが、本当に無茶をする

な。それにしても、この艦隊は一体？」

坂本は眼下の艦隊、特に一際目立つ大和を見ながら言った。

「とにかくこれ以上ここにいるのは危険だな。」

そう言って坂本は空母赤城へ向かった。

初陣（後書き）

少し戦闘の場面を付け加えました。

所属部隊は 501 統合戦闘航空団（前書き）

原作にオリジナルの話を付け加えて作りました。無理やりなので
うざよろしく。

所属部隊は 501統合戦闘航空団

遣欧艦隊はその後、連合艦隊の護衛をうけ、ブリタニアの501基地に着いた。

「宮藤、ここが私達の基地になる所だ。先に宮藤博士の墓に行くから、後で入り口に来い。」

「はい、坂本さん、宜しくお願いします」

と、宮藤は頭を下げた。

連合艦隊はその後、ここに入港後、司令官はブリタニアの総司令部に出頭することになっていた。

「長官、一人で大丈夫でしょうか？もし宜しければ私がお供します。」

「

山本と共に海軍航空隊を育てあげた大西瀧次郎は言った。

「気持ちはいりたいが、司令一人で来いとの通達だ。」

大西はまずい顔をするけど、直に顔をもどし

「長官がそう仰るなら私は従います。」

その後、全兵士達に見送られて、山本は杉田と共にキューベルワゲンに乗り、総司令部へと向かった。

その頃、宮藤と坂本は宮藤博士の墓に来ていた。

宮藤は墓の前でしばらく黙祷を行った。その間坂本は、少し後ろでその様子を見ていた。

「お父さん、なんで、なんで、今更になって手紙を届けたの。もしかして、生きていると思ってここまで来たのに。」

宮藤の目からは涙が流れていた。そして、墓に被さっている埃を掃うとそこには、

・その力を多くの人を守るために

「それは、宮藤博士がよく言っていた言葉だ。ストライカー・ユニットもその思いから生まれたものだ。」

宮藤は涙を拭い、決心したような目で坂本に向かい。

「坂本さん、私をストライクウィッチーズに入隊させてください。お父さんの言葉を守りたいんです。」

坂本は驚いた。ここに来るまでずっと軍への入隊を拒否していたからである。

「私はここブリタニアで、みんなを守りたいんです。」

（みんなをまもりたいか、宮藤博士のいい所を受け継いでるじゃない

いか)

「よし、わかった宮藤。後のことは全部私に任せろ。後でみんなに自己紹介だ。」

「はい」

夕焼けが終わり、太陽が沈み始めていく。

(お父さん、私はこのブリタニアで皆を守ります。だから、見ていてください。)

その頃総司令部では、チャーチルとマロニー空軍大將は驚いていた。なにせこの世界の人間ではないと言われては当然である。

「では、君達はこの世界の人間ではない。そうだね？」

「はい、私達は突然、呉に來た台風に巻き込まれて、艦隊ごとアラビア海に漂流していた」

二人は信じられない顔で見ていたが、杉田も同じようなことを言うので信じた。

「それでは、あなた方の所属部隊を言います。あなた方は、第501統合戦闘航空団の艦隊としてこのブリタニアの防衛及び、ガリア方面の解放等を命じます。あなたよりも階級は下ですが、そのミ

「ナ中佐の指示に従ってください」

「分かりました」

そう言つて山本は立ち上がり、敬礼をした。

帰路の中杉田と談笑をしながら、501航空団の基地に向かった。

その夜、

「ええ、本日より第501統合戦闘航空団の配属となった、宮藤芳佳だ」

501のメンバーは、それぞれ反応は違うが、拍手で迎えてくれた。

そして、

「本日より、第501統合戦闘航空団所属の艦隊となった。連合艦隊の司令である山本五十六特務大将です。」

特務というのは、総司令部がミーナに指揮をさせやすいようにしたはからいである。

「山本です。どうぞ、皆さんよろしくお願いします。」

そう言つて、敬礼をした。 ウィッチ隊もそれに応え、敬礼を返した。

所属部隊は 501統合戦闘航空団（後書き）

山本等、連合艦隊も本格的にストーリーに入ってきます。他の参謀も少しずつ出てくるので、皆さん応援を宜しくお願いします。

自己紹介（前書き）

自己紹介がメインです。たぶん、全員出すことは出来ないと思います。

自己紹介

山本は旗艦大和にて会議を行っていた。

「そのため、わが艦隊は501航空団に配属となった」

山本は、総司令部の命令を参謀等に伝えた。

「長官、私達は彼女等よりも階級は上です。なのに、何故我々は従わなければならないのですか？」

それも当然である。本来、軍は階級の上の人の言うことは絶対である。それを、下の階級の者の言うことを聞くことは屈辱的でもある。

山本はそんな参謀等に

「納得いかないこともあるだろうけど、この世界の事をまだよく分らないのである。だから、ここは、従うべきだろう。」

参謀等も山本の言葉には逆らうことが出来ない。意見を言うことは、軍でも正当であり、指揮官が迷っているときは、副官や参謀も意見を言うことができる。だが、具体的解決策がいまこの場に居る者で持っているはずもなかった。

「我々は、元の世界に戻るのでしょうか？」

皆、思っている疑問を三川軍一中将は述べる。

「今はまだ分からん。だが、我々は必ず元の世界に戻る。それだけ

は皆、忘れないでいてもらいたい」

その言葉に皆頷いた。

一方、501基地でも、ミーナ中佐が皆をミーティングルームへ集めていた。

世界中から集まっただけあって、それぞれ、軍服のもの、自分の服など様々である。寝ているもの、机にうつ伏せになっている者、しっかりと座っている者と、こちらも様々である。

そんな中、ミーナ中佐が宮藤を連れて入ってきた。そして、前の机の所に行き

「はいはい、皆、注目」

ミーナは手を叩いて皆を注目させる。

「今日から正式に配属となった。宮藤さんよ、みんな、仲良くするように。」

「宮藤芳佳です。よろしくお願いします。」

そう言って、頭を下げた。

「階級は、軍曹なので、同じ階級のリーネさんが面倒を見てあげて

くださいね。では、解散」

その合図と共に、みなが立ち上がった。ミーナは机から離れた。芳佳はおどおどする。

そんな時、後ろから、手が伸びてきて、芳佳の胸を揉む。芳佳は赤面しながら困惑した。

「どうだ？」

と501で一番背の高い魔女が聞いてきた。

「うーん、残念賞」

プラチナ色の髪の毛の長い魔女は、

「リーネは大きかった。」

と、リーネの方を向いて薄ら笑いを浮かべた。リーネは、顔を下に向けたままである。

「あっははは、私程じゃないけどな」

と、言って、手を差し出してきた。

「私は、シャーロット・E・イエーガー、リベリオン出身で、階級は大尉だ、シャーリーって呼んでくれ、宜しく」

「宜しく願います。」

芳佳は、その手を握ったが、強く握られて痛みを堪える破目になっ

た。

「うーん、詰まんない」

先程、胸を揉んだ小柄な魔女は、シャーリーの胸の間へ顔を入れる。

「私はフランチエスカ・ルッキーニ、ロマーニヤ出身で、階級は少尉」

「よ、宜しくおねがいします。」

プラチナ色の長い髪魔女は、眠っている銀髪の少女を連れてきて。

「私は、エイラ・イルマタル・ユーティライネン、スオムス出身で、階級は少尉」

「こっちは、サーニヤ・？・リトヴァク、オラーシャ出身で、階級は中尉」

エイラは、サーニヤの分まで自己紹介をする。

「よし、各自、自己紹介はそこまで、午後から宮藤とリーネは訓練だ。」

「はい」

芳佳は大きな声で返事をするが、

「はっ、はい」

リーネは、どこことなく消極的である。

「よし、それまでリーネは宮藤にこの基地を案内してやれ」

坂本は指示をした。リーネは芳佳の所に近づき

「リネット・ビショップです。」

と、リーネは自信無さそうに自己紹介をする。

自己紹介（後書き）

すみません、中途半端に終わってしまつて。次回はバルクホルン、ハルトマンも出てくるのでお待ちください。

ストライクウィッチーズの任務（前書き）

ども、前回の続き兼新話です。どうぞ宜しく。

ストライクウィッチーズの任務

リーネは、坂本少佐の午後の訓練まで宮藤を案内するようになんて言われて

「ここが、皆の使う食堂です。」

「今日の食事当番はどうなっているの？」

「特に決められてはいませんが、主に私がやっています。でも、時々皆が自分の国の料理を作ってくれますよ。」

それを聞いて芳佳は嬉しくなり

「じゃあ、扶桑の料理も食べてくれるかな？」

「料理は得意なんですか？」

「自分の作った物を食べてくれるのが嬉しいの。」

リーネは軽く頷いた。

「あつちが司令室のある建物です。」

リーネと宮藤は外歩いていた。

「あのう、その建物の前で取材をされているのは誰ですか？」

リーネは司令室の建物をみて

「エーリカ・ハルトマン中尉です。先日、撃墜数が200機を越したんでその取材を受けています。」

「その隣はゲルトルト・バルクホルン大尉です。撃墜数は250機を記録しているんですよ。」

芳佳はその数に驚いた。

「今までそんなに戦ってきているんだ。」

「ここが基地で一番高い所です。」

司令室の建物の最上階の窓を開けてリーネは説明する。その先には、ヨーロッパ大陸が広がっていた。

「ヨーロッパは今ネウロイに侵攻をされて、そのほとんどが占領されています。」

リーネは悲しそうに言った。その顔には微かに涙が流れた。

その後

坂本の地獄とも言える過酷な訓練を宮藤、リーネは行っていた。

滑走路の往復を行っているときに坂本は

「お前達の前には何が見える？」

「海です。」

「その先は？」

「ヨーロッパです。」

「ヨーロッパは今どうなっている？」

「ネウロイに占領されています。」

「そうだ、我々はそのを奪還しなくてはならん。お前達に必要なものはまず体力である。後10往復。」

「はい」

それが終わり2人はヘトヘトになってしまった。だが、その後は飛行訓練が行われようとしていた。

3人はハンガーに行きユニットの装着を行っていた。そのとき、

「坂本少佐、私も訓練に参加させて頂きますは」

金髪の少女がハンガーの中に入ってきた。

「お、新人と一緒に訓練とほいい心掛けだな。」

「いえ、私は、その、タッグを組んだほうがやりやすいかと」

少しモジモジした感じで答えた。

「気が利くな。」

「私はペリーヌ・クロステルマン、ガリア出身で、階級は少尉です
ことよ。今日はあなた達の訓練に付き
合って差し上げますは。」

ペリーヌは貴族調でいった。

「宜しくおねがいします。」

芳佳はお辞儀をするが、ペリーヌはそっぽを向いてしまう。

「では、訓練を始める。」

坂本の号令と共に全員が魔道エンジンを点火する。轟音と共に4人は空へと上がった。

訓練が終わり、2人はもはや動けなかった。

「ま、初日はこんなものか。」

「あなたが居ると足手まといですわよ。」

ペリーヌは喧嘩口調になって言ったが、

「訓練も十分につんでいないんだ。しかし魔法のコントロールはバラバラ、体力もまだ足りないな。」

「それよりも坂本少佐、試してみたい空戦機動があるのですが、宜しければ付き合ってくださいませんか？」

「じゃ、もう一回飛ぶか」

そう言つて二人は再度、上昇していく。その間にペリー又は芳佳に向かつて、ベー、をした。

そして動けない2人の所にバルクホルンが来た。

「新人、ここは死亡率が一番高い最前線基地だ。命がほしいなら、荷物をまとめて国へ帰れ。」

そう言つと、バルクホルンは立ち去つた。

次の日、ミーティングルームでミーナは

「今日はガリア地方での偵察任務があります。連合艦隊から戦艦、大和、武蔵、長門、陸奥、金剛、榛名、空母、蒼龍、飛龍、その他、駆逐艦15隻が出撃します。そして、途中から、坂本少佐、バルクホルン大尉、エーリカ中尉、ペリー又少尉が空母から発艦し、ガリア上空を偵察します。」

「これまた、大胆な命令を上層部は送ってきたな。」

「ええ、そして、これが連合艦隊初の出撃です。山本さん、よろしいですか？」

「はい。」

ミーティングに参加するようと、ミーナから言われて山本も参加していた。

「連合艦隊は、いつでも出撃できるように準備をしています。兵達も日頃の訓練を試せると喜ぶでしょう。」

実際、連合艦隊の訓練は、厳しいの一言。この一週間も休み無しに訓練を続けていて、この世界のどの海軍にも負けない高い練度を獲得していた。

「では、宜しくお願いします。」

と、ミーナは敬礼をした。山本もそれに答える。

昼になり、連合艦隊の出撃艦は一斉に出港し、途中で輪形陣を作った。

ガリアに近づき、坂本達は各空母から発艦した。続き、偵察機の彩雲も発艦した。

彩雲には機体下部に偵察用カメラを付けている。ウィッチの各機もカメラを持っている。

その時、基地ではネウロイ接近を知らせる警報が鳴っていた。

「出撃できるのは私と、エイラさんだけ、サーニャさんは？」

ミーナは出撃待機所にいるエイラに聞く

「夜間哨戒で魔力を使い果たしている。ムリダナ」

エイラは指でバツを作って言う。

「では、出撃しましょう。」

そのとき、芳佳が入ってきて

「私もいきます。行かせてください。」

芳佳は頼み込むが、

「残念だけど、訓練の十分でない人を実戦に出すわけにはいかないの。」

その後も芳佳は強く訴えるので、

「でも」

と、ミーナが迷っていると。

「私も行きます。」

リーネが入ってきた

「二人いれば、一人分にはなります。」

その言葉にミーナは負けて、

「90秒で支度しなさい。」

4人は無事出撃をした。

「二人はここで援護を、エイラさんと私が先行します。」

そう言つて二人は加速した。今度のネウロイは非常に速くて、射撃を思う様に当てられない。

「速度を合わせて、後方に。」

エイラは親指を立てて答えたが、ネウロイはさらに加速をした為、二人はもはや追いつけなかった。

「リーネさん、宮藤さん。あなた達が便りです。ネウロイを仕留めて。」

無線でその声を聞き、リーネは焦ってライフルを構える。が、なかなか当たらない

「だめ、私、飛ぶことに精一杯で射撃をコントロール出来ないの。」

「じゃあ、私が支えてあげる。」

そう言ってリーネの股の間に入った。

「これで安定する?。」

「はっ、はい」

リーネはそう言って射撃を開始する。その中の一発がコアに当たり、落ちた。いった。

「やった、やったよ、宮藤さん。私、初めて撃墜したよ。」

と、リーネは芳佳に飛びついた。その為、二人はバランスを崩して海に落ちた。

「芳佳でいいよ、私達、もう友達だもん。」

芳佳のそんな言葉にリーネは嬉しくなり

「それじゃあ、私もリーネで」

「うん分かったよ。リーネちゃん」

「ありがとう、芳佳ちゃん」

二人はその後、偵察任務を終えて、帰投中だった連合艦隊の駆逐艦に救助されて基地に戻った。

ストライクウィッチーズの任務（後書き）

ようやく、5話を書き終えました橘花です。オリジナルも加えて書きました。今後とも宜しく。

新キャラ予告（前書き）

この先出す予定の新キャラです。

新キャラ予告

・高岡たかおか 祥子しょうこ

・扶桑皇国ジェット戦闘脚実験部隊

・使用機材：橘花

・モデル：ジェット戦闘機 橘花きっかのテストパイロットである

高岡すすむ

・犬塚いぬづか 和子かずこ

・扶桑皇国ジェット戦闘脚実験部隊

・使用機材：秋水

・モデル：ロケット推進戦闘機 秋水しゅうすいテストパイロットの一

人 犬塚豊彦

・佐藤さとう 武彦たけひこ

・扶桑皇国陸軍補給物資輸送隊

・乗機：富嶽（史実では爆撃機として設計。この話でも爆撃機としても出るが、主に各基地と扶桑間の輸送を行う）

・オリジナルの人物

新キャラ予告（後書き）

今後、この三人が新キャラとして出す予定です。他にも出るかもしれないので楽しみにしていて下さい。

バルクホルンの過去（前書き）

話の内容は4話をモデルにしています。

バルクホルンの過去

バルクホルンは夢の中でカールスラント防空戦の夢を見ていた。そのときに燃えさかるネウロイが落ちていく下に妹のクリスが泣いていた。

「クリス、そこから早く離れて。」

だが、時既に遅く、ネウロイの墜落に巻き込まれて、意識を失っていた。

「クリスー」

バルクホルンはそう言って目覚めた。

「今更なぜ、あんな夢を？」

そして、軍服を着て、食堂に向かった。

食堂では、リーネと宮藤が朝食を配っていた。連合艦隊の下士官数人もリーネと宮藤の朝食を配られていた。

「いつもありがとうございます。皆を守る為にもしっかりと食べてください。」

そう言って宮藤は頭を下げる。

「皆を守るか、」

バルクホルンの弦きが聞こえたらしく、宮藤は

「え、どうしたんですかバルクホルンさん？」

「いや、何でもない。独り言だ忘れてくれ。」

食事をさっさと摂って食堂を離れていくバルクホルンを見てミーナは、

（あの子、またクリスちゃんの事を思い出して）

そして、ミーナは改まった顔で

「そうそう、宮藤さん、リーネさん。今日扶桑から補給が来るから滑走路の方に出ていてね。」

「はい、わかりました。」

その昼、遠くに巨大な6発機が現れた。

「おつきいなー、扶桑があんな巨人機を作り上げるなんて」

連合艦隊の参謀も啞然として見ていた。特に、航空機が次期新戦力

と考えていた山本に

「こちらの世界で日本は世界有数の航空大国となっているようです。

と、副官が言ってきた。

「私が渡米した時にも、アメリカにこんな巨人機なんて無かったぞ。

山本は海軍武官時代に渡米をしてアメリカの工業力の高さを見ていたが、こんな巨人機は見たことが無かった。

その巨人機は滑走路に着陸して車輪固定器に車輪を止めて停止した。巨人機のため、着陸距離が長いから車輪固定器を滑走路に付けている。

その操縦席から一人の男性パイロットが降りて敬礼をした

「自分は扶桑皇国陸軍補給物資輸送隊の佐藤武彦飛行兵長です。」

そう言つて補給物資を下ろし始めた。芳佳とリーネ、それに整備兵や連合艦隊下士官等も手伝う。

積み下ろしが終わり、富嶽は短距離ロケットエンジンを取り付けて離陸した。

その晩、バルクホルンは部屋の明かりも点けずに窓の外をみていた。

そこにミーナが入ってきて

「どうしたのトゥルーデ？」

バルクホルンはミーナに気づき

「眠れないんだ。」

「また、クリスちゃんの夢を？あれは、あなたが悪いんじゃないのよ。」

「クリスを守らなかったことは事実だ。それに、祖国も」

「国を失ったのはあなただけじゃないのよ」

確かに同じカールスラント出身のミーナ、エーリカ、それにガリア出身のペリーヌも皆国を失った。

思いつめているトゥルーデを見てミーナは

「そうだ、休暇も溜まっているし、お見舞いに休暇でも取って行ってきたら？最近行ってないんですよ？」

「その必要は無い。私は全てを501に奉げた、クリスの知る姉はあの日、あの戦場で死んだ。次の作戦にも必ず出してくれ。」

そう言うと、部屋から出て行ってしまった。

（全くあの子たら、）

次の日、朝早くから警報が基地内に鳴り響いていた。

「敵はガリア方面より接近中、全員直ちに出撃」

ミーナはそう言って出撃、皆後に続く。連合艦隊の方も

「第一航空戦隊及び、第一戦隊所属艦艇は出港せよ、航空隊も急ぎ発艦せよ」

山本の号令で各艦艇は出港していく、航空隊の零戦も発艦していく。

零戦隊隊長の下川万兵衛大尉は

「我々零戦隊初の実戦である。各員奮闘せよ。」

そう言って501の後を追う

「全員、攻撃を許可する。目標ネウロイ」

ミーナの声に全員が了解をした。

この世界に来て、零戦をはじめとする連合艦隊の艦載機にはカールスラント製の優れた航空無線機を積んでいて、史実では考えられない連携攻撃を行う事ができる。だが、

相手はビーム兵器をもつネウロイである。バルクホルンとエーリカはネウロイに向かって急降下する。エーリカは一撃離脱をするが

バルクホルンはそのままネウロイの近くで銃撃をする。

「なにしているのトゥルーデ、離れなさい。」

ミーナの声にバルクホルンは

「大丈夫だ、こんな奴直に落ちる」

「危ない！」

「えっ」

バルクホルンは上を見ると、燃えながら落ちてくる零戦が目に入る。そして、バルクホルンに直撃した。

激突の寸前に魔力のバリアを張ったため爆風は受けなかったが、激突の衝撃と破片で気を失い、きりもみ状態で落ちていく

「バルクホルンさん」

「トゥルーデ」

宮藤とエーリカはバルクホルンを追う

「おのれ」

坂本等はネウロイに激しく攻撃を加える。

なんとか追いついて助けたバルクホルンを芳佳は治癒魔法で傷口を治す。途中、バルクホルンの意識が戻り

「何をしている宮藤、早くネウロイを倒せ。私に構わずはやく」

「嫌です。」

「えっ」

「私は傷ついた人を放っておけません。」

「いいんだ、私はもう、既に死んでいる。クリスを守れなかったあの戦いで」

「まだあなたは死んでいません。あなたは私なんかよりも多くのネウロイを落とせます。」

「無理だあ、私はたった一人の、妹を守れなかった最低の姉だ。」

芳佳はバルクホルンの事情を察して

「確かに皆を守るのは無理かもしれない。でもだからって、傷ついている人を見捨てることは出来ません」

そして、芳佳は気を失った。後ろでネウロイのビームに耐えていた
エーリカも魔法力が尽きて倒れた。

バルクホルンはクリスとの思い出、そして、あの戦いがフラッシュ
バックした。

そして、二人の銃を持ち、急上昇をしてネウロイに迫った。銃を連
射して、ネウロイのコアを見つけ

そこを狙い撃ちをして破壊した。

ミーナはバルクホルン傍にいき、頬を叩いた。

「何をやっているのトゥルーデ、私達はもう家族なのよ。皆の為に
も、そしてなによりクリスちゃんの為
にも絶対死に急いじゃだめ」

ミーナは泣き顔で言った。

「そうだな、」

しばらく間をおき

「休暇を貰えないだろうか？久しぶりにクリスのお見舞いに行きた
い。」

「ええ、いいわよ」

そして、バルクホルンは下を向き

（ありがとう、宮藤）

その後501は、赤城に着艦をして基地へと帰った。

この戦闘は扶桑にも伝えられ、96式艦戦、現在試作中の12試艦戦はネウロイに敵わないと分かり、新型機の開発を各航空会社に命じた。

バルクホルンの過去（後書き）

早速前回の予告の一人が出ました。後の二人もこの次に出す予定です。次は501がアフリカ戦線に行く話しを作ろうと思っています。誰も評価してくれませんが、負けないで連載していきます。

アフリカへ（前書き）

前回の予告通りアフリカへ行きます。

アフリカへ

「今日は一時的だけど皆さんと共にする仲間を紹介します。入ってきてください。」

ミーナがそう言うと、ガチャッとドアが開き二人が入ってきた。

「私は扶桑皇国ジェット戦闘脚実験部隊所属の高岡祥子中尉です。」

黒髪をきれいに整えて切つてある13、4歳位のウィッチが言った。

「私は扶桑皇国ロケット戦闘脚実験部隊所属の犬塚和子中尉です。」

こちらは、少し茶色の混じった髪をしたウィッチが言った。二人とも同じくらい歳であった。

「この二人は最近完成したばかりの次世代ストライカーユニットの実戦における性能を確かめる為に配属されました。」

「次世代ストライカー？」

皆が疑問を浮かべた為、ミーナが簡単な説明をした。

「ええ、カールスラントの技術陣が比較的安全な扶桑に渡って実験をしていたストライカーで、通常のストライカーの約2倍の推進力が得られます。」

「2倍も推進力を！」

「その性能が実戦でも出せるかどうかを確かめる為にきました。」

犬塚は言った。

「はい、ではこの話はここまでとして本題に入ります。我々501は二人を加えて、陸戦ウィッチ及び、連合艦隊と共に現地のウィッチーズ隊と協力して、アフリカを解放するために明日出撃します。」

「アフリカにはネウロイの巣が一つだけ、それを叩けばアフリカは解放されます。」

皆が喜んだが、バルクホルンは

「ミーナ、それではブリタニアの守りが薄くなるのではないのか？ここは欧州との最前線だぞ。」

「その心配はありません。あなたが撮ってきた偵察写真と昨日空軍が撮ってきた写真を見る限り、ネウロイの数は増えていません。仮に攻めてきたとしてもブリタニアには、他にも各国から集められたウィッチと戦闘機部隊があります。」

「だが、今まで彼等が出てきたことはなかったぞ」

「私達が洋上にて撃墜するため、内陸に入られないので彼等の出番が無かっただけです。」

たしかに501が今まで内陸まで入れるような戦闘はしていない。

「ええ、それでは連合艦隊の編成は山本さんが説明します。」

後ろに座っている山本は立ち上がり、前に出て説明した。

「我が連合艦隊は前衛部隊に戦艦長門、陸奥、扶桑、山城、伊勢、日向、空母瑞鶴、翔鶴、巡洋艦8で編成。主力部隊に戦艦金剛、榛名、比叡、霧島、空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍、巡洋艦5で編成。陸戦ウィッチ上陸部隊は戦艦大和、武蔵、明日扶桑から到着する新鋭戦艦推古、空母大鳳、信濃、隼鷹、飛鷹、巡洋艦6、輸送型駆逐艦5、輸送船5で編成します。」

推古はこちらの世界の紀伊型とってください。ちなみに、大鳳、信濃は実験部隊の為にブリタニアにて甲板の延長をさせ、カタパルトを取り付けた。

「そんな大艦隊で出撃するのかよ！」

シャーリーは素直な感想を述べた。

「はい。今、潜水艦にてその作戦を現地のウィッチ達に報告へ向かっています。総力戦になりますので向こうも主力を出すでしょう。」

「私達の編成は私、ハルトマン中尉、バルクホルン大尉は加賀。坂本少佐はリネット軍曹とペリー又少尉で隼鷹。イエーガー大尉はルッキー二少尉で翔鶴。エイラ少尉は宮

藤軍曹とサーニヤ中尉で瑞鶴。犬塚中尉と高岡中尉は信濃の編成で行きます。」

芳佳はエイラ少尉とサーニヤ中尉とあまり話したことが無いので、これを期に仲良くなろうと思った。

「宜しく願います。エイラさん、サーニヤさん。」

宮藤は二人の所に行って、あいさつをした。

「ああ、宜しく宮藤。」

エイラは普通に話してくる。

「宮藤さん宜しく。」

サーニヤは微妙な感じで話してくる。

その晩、三人はエイラの部屋に泊まった。出撃前の親睦を深めるということで坂本少佐が提案してきた。

二人とも、特に嫌がる素振も見せずに明日のことを話していた。

次の日、ミーティングにてミーナは

「昨日も言った通り、アフリカへと出撃します。現地にて、陸戦隊はパットン中将指揮の部隊です。これをストームウィッチーズと共に守ります。エジプト軍も援助をしてくれるということなので、陸戦隊

をなんとか首都まで守るように」

「了解」

皆、やる気だけはあった。この作戦の成功、すなわち、アフリカが解放される。それは他のウィッチーズ隊の指揮が上がることもあり、この戦いを早く終わらせることが出来るかもしれないと思っていた。

「それでは、各自昨日の編成の通り各空母へと乗艦せよ」

そう言うと、皆、いつきに駆け出した。それぞれが空母に乗ったところで艦隊は編成表の通りに次々と出港していった。

アフリカへ（後書き）

次回はアフリカに派遣された陸戦ウィッチ上陸戦です。

上陸作戦（前書き）

前回の予告の通り、今回は陸戦ウィッチの上陸戦です。

上陸作戦

出港して2時間。艦隊はスペイン沖を進み、ジブラルタルに入り始めていた。

「なあサーニヤ、宮藤、この作戦成功すると思うか？」

エイラは実戦前の緊張を和らげるために聞いてきた。

「エイラさん、思うんじゃないくて、させるんですよ。」

「そんなことは分かってるよ。ただ、こんなにも大規模な反攻は初めてで。」

「確かに私も初めてです。でも、これで多くの人が救えるなら私はやります。」

「そうよエイラ、だから、成功させるんだよ。」

「うー、サーニヤが言うんなら自信が出てきたぞ。」

とことんサーニヤに弱いエイラであった。

艦隊は一時ロマーニヤにて燃料等の最終補給を済ませた。そこで陸戦ウィッチを乗せた輸送船も艦隊に組み込まれた。ミーナは攻撃方法を伝えた。

「先発隊は連合艦隊の航空隊を首都まで護衛すること、終わったら、パットン陸戦隊の防空をすること。主力隊はパットン陸戦隊をストームウィッチーズと共に防空すること。上陸隊は陸戦隊の上陸を援助すること。」

皆が了解をして、艦隊はロマーニヤを出港した。

エジプト近海に到着して、先発隊は航空隊を発艦させた。この日の為に各機はエンジンを換装して武装も強化された。ゼロ戦は、2000馬力のエンジンを積み、30mmを2門、20mmを4門、速度は694kmという信じられない性能を発揮する。97式艦功は同じく2000馬力を積み、15ミリを2門、後部に12.7ミリを一門、爆装も1tまで搭載できる、速度は675kmを出す。99式艦爆も2000馬力を積み、15mmを2門、後部に12.7mmを1門、爆装は800kgまで搭載できる、速度は688kmを出せる。各機共に習熟訓練も済んでいた。この部隊にエイラ隊とシャーリー隊も護衛を任されている。

誘導として彩雲を先行させている。

編成はゼロ戦54機、97式艦功50機、99式艦爆45機と編成としてはあまり良いとはいえないが、ウィッチ隊の援護があるし、1回しか攻撃できないのでこの編成で攻撃を行うことに決めた。

「この部隊で首都の地上ネウロイの数を減らせるのか？」

シャーリーは尤もな疑問を言う。

「通常爆弾でも地上ネウロイは倒せると分かっているから大丈夫だろう。それに、小型ネウロイなら戦闘機の機銃でも落とせるしな。」

エイラは答えるも自分自身では不安だった。出撃前の占いは最悪だったからだ。

主力隊も遅れること30分後に全機発艦を完了した。

上陸部隊はさらに浜辺に近づく。だが、激しい砲撃を陸地の方から受ける。地上ネウロイからの砲撃だった。

「砲術長、主砲を使って殲滅せよ。」

「主砲、右20°、仰角34°、一斉掃射始め。」

大和砲術長の号令で主砲は動き始める。そして、凄まじい発射音と共に砲撃してくる方角が一斉に火柱が昇る。

「ネウロイ沈黙。」

監視員が報告する。

「さらに接近せよ。航空隊も発艦して上空より援護させよ、上陸部隊は出撃準備。」

大和艦長は矢次に指示を飛ばす。艦長の高柳儀八大佐は砲術学校を出ているだけあって接近戦の砲撃の優位性を知っている。だから、敵弾を恐れずに敵に接近していく。

「次弾装填、掃射せよ。」

次々と大和をはじめとする艦艇が砲撃を加える。航空隊も無事に発艦も終えて、生き残っている地上ネウロイの攻撃に取り掛かった。

「リーネ、逃げていくネウロイを狙撃しろ」

戦闘の指揮を執っている坂本は命じた。

「了解」

リーネは逃げていくネウロイを狙い、狙撃をした。あっという間にネウロイは拡散した。実験部隊の二人もストライカーの性能をフルに発揮して戦っている。

「上陸部隊、準備完了との事。」

副長が高柳艦長に伝えた。

「よし、上陸部隊は上陸を開始、ウィッチ隊は上陸を援助、我々は砲撃でネウロイを牽制しろ。」

上陸用端艇は次々と輸送船や駆逐艦から出撃していく。砂漠作戦は初めてだが、歴戦の陸戦ウィッチ達は上陸に成功。逃げるネウロイを攻撃して、橋頭堡を確保することができた。

「艦長、上陸は大成功です。」

副長は高柳艦長に報告をした

「各艦艇は転舵、上空のウィッチ収容後、主力部隊の合流する。」

そう言って艦長は艦橋を後にした。

その頃、先発隊の航空隊は首都目指して一直線に向かっていった。

上陸作戦（後書き）

次は首都攻撃を書く予定です。感想と評価を宜しく。

首都爆撃

先発隊は飛ぶこと40分、エイラの隊とシャーリーの隊は攻撃隊と共に誘導機の彩雲に誘導されていた。

「エイラさん、この方角で本当に合っているんですね？」

宮藤はアフリカの地理にはあまり詳しくない。

「さあな、誘導機に誘導されているから分からないな。」

前方の彩雲は攻撃隊を首都まで誘導していたが、突然バンクを振った。

「前方より小型ネウロイ接近」

その瞬間、ウィッチと護衛のゼロ戦隊はネウロイを撃墜するために彩雲の前方に出ようとする。だが、少し遅くて彩雲にネウロイの攻撃が集中する。彩雲は巧みな機動でこれを回避するが、限界が近かった。

「宮藤、誘導機の前に出てシールドで守ってくれ。あれが落とされたら首都までたどり着けない。私達がネウロイを倒すまで守ってくれ。」

芳佳は了解すると、彩雲の前に出てシールドを展開する。

「うお、何だこれは、」

彩雲のパイロットは驚いた。

「ゼロ戦隊は敵を撃墜せよ。彼女等に遅れをとるな。」

ゼロ戦隊指揮官の岩本徹三は言った。

「了解、日頃のもう訓練を試せます。」

カールスラント製の航空無線は優秀であり、史実では全く役にたたなかった無線とは大違いである。

ゼロ戦隊はネウロイの真ん中に突っ込んで行き、機銃を発射した。ズガガガッと発射音がしてネウロイは翼をやられるなどして落ちていく。エイラ等も突っ込んで戦っているが、多勢に無勢である、ネウロイは百機近くも投入してきたのである。攻撃を逃れたネウロイは攻撃隊の方に向かっていく。

「宮藤、そっちに行った。可能な限り撃墜してくれ。」

「宮藤さんならきつと出来るわ」

エイラとサーニヤに言われて宮藤は機銃を構える。近づいてくるネウロイに連射をした。ネウロイは次々と火を噴いて落ちていく。敵の第一波は何とか凌いだが、ゼロ戦は3機が落とされた。3機のパイロット

は皆脱出に成功していて助かってはいる。攻撃隊は全機無事である。

「坂本少佐、援護をお願いできませんか？」

エイラは無線で上陸部隊援護の坂本に要請する。

「分かった。こちら準備出来次第援護に向かう。」

坂本等は15分後に各機のフルスピードで先発隊の攻撃隊を追う。実験部隊のスピードは凄まじく、出撃

からわずか20分で合流した。坂本等もこの15分後に合流した。

再び彩雲はバンクを振る

「ネウロイ発見、今度は先ほどよりも数が少ない。」

坂本等は目を疑った。確かに先ほどの攻撃よりは数が明らかに少なかった。

「どういうことでしょう坂本少佐？」

ペリー又は坂本に聞いた。

「さあな、分からんがこのまま放っておくわけにもいかん。」

そう言うとき坂本は全機突撃の合図をする。ウィッチの後ろにゼロ戦隊も続いた。

「こちら攻撃隊、後方より別のネウロイを確認。数は前方のと同じくらい。」

坂本は後ろをみて驚いた

「はめられたか。」

挟み撃ちを喰らったのだ。

「我々ゼロ戦隊は後方のネウロイを倒します。前方は任せました。」

岩本がそう言うと、ゼロ戦隊は反転をした。

各機の奮戦で何とか攻撃隊は首都を視認できた。

「前方に首都を確認、ネウロイは約80体を視認、各機攻撃を開始せよ。」

攻撃隊の指揮を執る関行男大尉は命令に爆撃機は上昇する。ゼロ戦隊は機銃掃射のために降下する。っ

と、そのとき、攻撃隊が対空砲火による攻撃を受けた。

「敵に対空兵装あり、急降下爆撃隊はタンク型を、水平爆撃隊は対空砲を攻撃せよ。ゼロ戦隊は機銃掃射で援護をお願いします。」

そう言って、関機は対空砲目掛けて爆弾を投下する。爆弾は対空砲に吸い込まれるように命中した。

この時の日本海軍の爆撃精度はほぼ100%であった。それに都市部と違い、エジプトは建物の殆どが砂であり、壊された建物の鉄骨等をネウロイに利用されることはない。

急降下爆撃でネウロイを次々と破壊していく。攻撃が終わり、この攻撃の未帰還機はゼロ戦4、97式2、99式3というもので戦死者は1人もいない。ネウロイは対空砲は全て壊されて、80体中67体を倒した。これは大勝利であり、他の隊の指揮を大いに上げることができた。ここで、坂本等は陸戦ウィッチ隊の援護をしている、ミーナ等の所に向かった。

首都突撃（前書き）

陸戦ウィッチ隊がエジプトの首都へ突入していく話です。

首都突撃

ミーナ等は無事にパットン陸戦隊とその上空援護を行っているストームウィッチーズに合流することができた。そこで懐かしの顔を見る。

「久しぶりだな。ハルトマン、ミーナ、バルクホルン。」

そこには、彼女等がカールスラント防空戦にて共に戦った、ハンナ・ユステイナー・マルセイユがいた。

「おいマルセイユ、私はともかくミーナは中佐だぞ。敬語を使わんか。」

バルクホルンは怒った表情で言う

「いいのよトゥルーデ。」

「ミーナ、本当にいいのか？」

「お前だって敬語を使ってないだろ。」

「なっ、貴様だってそうだろ」

と、二人が言い争っている。

「おいおい、喧嘩ならこの任務が終わってからにしてくれないか。君達是我々が無事に首都へと突入するために援護しているのだぞ。」

無線機からの連絡で二人は我に返った。

「あのお、失礼ですがそちらは？」

「自己紹介が遅れたな。私はパットン中将、この首都解放軍の指揮官だよ。」

「し、失礼しました。中将殿」

「私がストライクウィッチーズの司令のミーナです。我々の任務はあなた達の上空防衛です。」

「そうか、宜しく頼むよ。」

ミーナ等は敬礼をする。パットン軍団は戦車56両、兵員輸送車34両、歩兵支援車24両などの大規模な部隊で陸戦ウィッチは28人が参加している。これに、アフリカでは無敵を誇っているというストームウィッチーズが防空をしている。

メンバーは指揮官の加東圭子大尉、スーパエースのハンナ・ユステイーナ・マルセイユ中尉、マルセイユの補助を務めるライーサ・ペットゲン少尉、配属されたばかりの稲垣真美軍曹とそれなりのメンバーが揃っている。

「前方にて、地上ネウロイを数体確認、戦車部隊は突入、ウィッチ隊は援護しろ。」

パットン中将の命令が聞こえてくる。

「上空にも、爆撃型ネウロイを視認、攻撃を開始します。」

ミーナの声に、バルクホルンとエーリカ、マルセイユが反応してすぐさま迎撃体制に入る。

「ミーナ、あの爆撃機は私達がやる。周囲の警戒を任せた。」

「分かったは、気をつけて。」

爆撃機の迎撃にバルクホルン、エーリカ、マルセイユ、ライーサが向かう。ミーナは固有魔法で周囲の警戒を行う。

地上のネウロイは後退をしていく。

「突撃しろ、奴等をこのエジプトから追い出せ。」

下では激戦が続いている。だが、パットン隊はほとんど損害が出ていなかった。

「こちらバルクホルン、ミーナこいつはなかなか硬い。」

いくら機銃を連射してもネウロイには傷一つつかないでいた。

「トゥルーデ、こいつ硬すぎるよ。なにか物理的に破壊しなくちゃ。」

「任せろ。」

坂本等が合流をした。坂本は扶桑刀を抜き、ネウロイに突き立てる。ネウロイはコアごと一刀両断されて白い破片に変わった。

「少佐、上陸とかも成功したのね。」

「ああ、攻撃も成功した。首都にいたネウロイの半数以上を倒した。」

坂本は状況を説明する。

「グズグズしてないで、地上部隊のスピードに合わせて。」

ストームウィッチーズの加東が言ってきた。

「ごめんなさい。それでは進みましょう。」

首都を目前とした位置までパットン軍団は進んだ。

「あと、敵ネウロイは地上に30、上空に12、」

ミーナの固有魔法の三次元空間認識で正確な数を伝える。

「かなり小規模だな、これなら解放できるだろう。」

坂本はそう言った。

「全軍突撃せよ」

パットン中将の号令で陸戦ウィッチ、戦車部隊が突撃をする。歩兵はネウロイの出す瘴気にやられないように防護服を着ている。

「ウィッチーズ隊も上空のネウロイを攻撃します。」

ウィッチ等はそれぞれの小隊に分かれて、一機ずつ落としていく。

ズガガガ、機銃を撃つもなかなかネウロイに当たらない。

「お願い当たって。」

宮藤はそう叫ぶ

「落ち着け宮藤、訓練を思い出せ。」

無線機から坂本の声が入ってくる。宮藤は落ち着いてネウロイを狙い、引き金を引く。

ズガガガと発射の後にネウロイは落ちていく。

「やったな宮藤。」

同じ小隊のエイラがほめてくれる。

「すごいよ、芳佳ちゃん。」

サーニヤもほめてくれる。

「えへへ、ありがとう。あつ、今名前で呼んでくれた？」

「うん、ちょっと変かな？」

「そんなことないよサーニヤちゃん。」

こんな会話をしているとエイラは宮藤のほっぺを引っ張る。

「いたい、いたいですよエイラさん。」

「えーい、サーニヤに変なことを言った罰だ。」

「やめてくださいエイラさん、今戦闘中ですよ。」

エイラは引っ張るのをやめて、次の敵を探した。だが、もう上空にはネウロイがいなかった。

地上の方も、砲声がやみ、エジプトの首都からネウロイは駆逐された。

「協力に感謝します。ミーナ中佐。」

加東大尉が敬礼をしてくる。

「こちらこそ、お役に立ててよかったです。」

ミーナも敬礼を返す。

「こちらはパットン中将だ、上空のウィッチ諸君、よく最後まで護

衛をしてくれた。部隊を代表して私からお礼を言おう。」

パットンは敬礼をしている。ウィッツチーズは敬礼を返した。

「マルセイユ、また会おうな。」

先ほどの喧嘩など忘れた表情でバルクホルンは言う。

「ああ、また会えるだろう。」

マルセイユも言葉を返す。

「ストライクウィッチーズ、これより帰投します。」

ミーナがそう言う

「了解」

そう言って、各空母に向かって飛んでいった。

エジプト解放 前編（前書き）

エジプトのネウロイの巢を破壊する話です。今回は前編です。

エジプト解放 前編

エジプトの首都解放を終えて、皆がほっとしていると。

「こちらは山本です。ウィッチーズ諸君は急ぎ、空母赤城へきてください。今度の作戦を説明します。」

山本の言葉にウィッチーズは動き出した。赤城へは各自のストライカーで向かった。

赤城艦内のミーティングルーム

「前回の作戦にてエジプトの首都は解放されました。ですが、まだアフリカにはネウロイの巣が残っています。」

そう言つて前の黒板にネウロイの巣を映し出す。

「これがあるのが、大体ピラミッドの上空です。」

「これを壊さないとネウロイはアフリカからいなくなるのか。」

バルクホルンは少し怒りを混ぜた口調で言う。

「ええ、そこで一旦ロマーニヤの軍港に入港して艦載機の爆撃機と攻撃機を全て戦闘機に換装します。」

「確かにネウロイの巢の攻撃に爆撃機や攻撃機は要らないからな。」

坂本はこの判断に同意する。

「というわけで、我々連合艦隊は一時ロマーニャへと向かい、そこでブリタニア海軍の艦載機に積み替えて出撃をします。」

作戦参謀の黒島亀人が言った。

「全艦、針路を北東にとり、ロマーニャ軍港に入港せよ。」

山本の号令で各艦艇はロマーニャへ向けて進んだ。

ーロマーニャ軍港ー

入港した空母からは爆撃機と攻撃機が下ろされて、ブリタニア海軍のシーファイアーが積み込められていく。そこでパイロット達のやり取りは実に奇妙なものだった。なぜなら、あのまま開戦していたら敵同士の国のパイロットになっていたからである。尤も、ブリタニア海軍のパイロットは知るはずも無いが。

時々パイロット同士の笑い声が聞こえてくるのを聞いて山本は

「あんな風に、軍令部の連中がなってくればいいのだがな」

近くにいた豊田は

「それは恐らく無理でしょう。頭の固い軍人が軍令部の大半を占めていますから。」

朝になり、連合艦隊は全艦出港をして外海にて輪形陣を組んだ。史実では殆ど輪形陣を組んだことが無かった。

「長官、今回の作戦は非常に危険な作戦です。我々は今まで以上に激しい戦闘に突入します。」

「そんな事は分かっている。第一、戦争に安全も危険も在るわけが無い。」

スエズ運河へと侵入した連合艦隊は航空隊の準備を命じた。

「航空隊は発艦準備をせよ。ウィッチーズ隊も出撃準備」

ウィッチ達も急いで赤城甲板へと向かう。準備が出来た者から発艦位置へと着く

Ｚ旗が上っていく、そして下り始めた。

「風に立て、航空隊発艦せよ」

南雲の声に、全機がスロットルを開き、加速していく。無事に発艦を終え、今度はウィッチーズが発艦をした。

彩雲が航空隊の誘導を行うために前へと出た。

「全機、我に続き高度２０００にて編隊を組め」

ピラミッドまで約１２０キロメートル位を飛行することになった。

エジプト解放 前編（後書き）

次回はネウロイの巢を破壊する話です。恐らく7日ごろに更新でき
ると思います。

感想と評価を宜しく。

エジプト解放 中編（前書き）

前回の続きです。

エジプト解放 中編

エジプトのピラミッドを目指して、ウィッチとブリタニア海軍、日本海軍の航空隊は低空を飛んでいた。

「なあミーナ、こんなにも低空で飛ぶ必要があるのか？」

バルクホルンはミーナに疑問を投げかける。

「ええ、私達の接近の発見を出来るだけネウロイ達に悟られてはいけないの。この作戦の内容はあくまでも奇襲です。」

前方を飛ぶ彩雲は攻撃隊とウィッチ達を無事にピラミッドまで誘導する任務を任されていた。

この日の為に機長と偵察員兼航法士はエジプトの地理に詳しい人の講義を受け、さらには彩雲にブリタニア製の新型高速電算機が搭載され、首都では首都解放作戦の成功の報告をラジオで流していた。これらを頼りに彩雲はウィッチと攻撃隊の誘導を行っている。

「機長、攻撃隊とウィッチ達は優秀な人達が集まっています。この低空飛行の中でも全く編隊が乱れません。」

彩雲の電信員は機内無線で機長に話しかけた。

「ああ、こんな砂漠を低空で飛ぶんだ、少しは編隊が乱れると思っていたのだが、要らぬ心配のようだな」

彩雲の機長である野中重雄少尉は彩雲での飛行時間は1200時間とベテランパイロットであり、このような低空飛行など朝飯前である。

「もう間もなく首都上空に到達します。各機、武装の点検をしてください。」

ミーナの言葉にウィッチ達は安全装置を外し、一連射をした。航空隊も機銃の試射を行う。

「点検完了、各機の武装に異常なし。」

航空隊指揮官である岩本徹三はミーナ中佐に合図する。

「了解、」

ミーナが答えたその時、前方を飛ぶ彩雲がバンクを振った。

「ネウロイ接近！距離約2000、数52」

彩雲の機長はそう言って、この空域から離れようと旋回をする。

「航空隊は全機攻撃せよ。」

「ストライクウィッチーズ、全機攻撃許可、目標は敵ネウロイ。」

ウィッチーズ、ゼロ戦隊、シーファイアー隊は自由戦闘に入った。

ゼロ戦は巧みな機動でネウロイの後方に回り込んで1機、また1機と撃墜するが、シーファイアーは機動力が弱く、ゼロ戦みたいな常識外れの機動を行えないため苦戦している。

「エイラ、そっちに敵が四機行つたは」

サーニヤの声に反応してエイラは体を強引に捻って、ダダダダダと機銃を連射する。3機を落とすが、1機は軸線をずらして離脱した。

「ありがとな、サーニヤ。」

「どういたしまして、エイラ。」

エイラの顔が真っ赤になった。

（ああ、サーニヤがあんな事を言ってくれた。これはもうここで死んでも悔いは無い）

「エイラさん、危ない。」

宮藤の声にエイラは我に返る。いつの間にかエイラは5機のネウロイに囲まれている。

（私としたことが、サーニヤの事で頭がいっぱいになり魔法で気づいていても頭が理解しなかったか）

エイラは心底悔しがる。が、宮藤がエイラとネウロイの間に入り、シールドで守った。

「宮藤。」

「エイラさん大丈夫ですか？」

「すまん宮藤。」

サーニヤがフリーガー・ハンマーでエイラと宮藤の周りにいるネウロイを倒した。

「エイラ、宮藤さん。大丈夫？」

サーニヤが近くにきて心配そうに尋ねる。

「うん、ありがとうサーニヤちゃん。」

サーニヤは少し恥ずかしそうになり、頬に赤みが現れる。

「エイラさんも大丈夫ですか？」

「ああ、すまんサーニヤ、宮藤。」

何とか全機を撃墜することが出来たが、シーファイアーはほぼ全滅の状態である。ゼロ戦はまだ戦力に余裕を残している

「高岡さん、犬塚さん、大丈夫ですか？」

二人は既に息切れの状態であつた。

「これくらい大丈夫です。」

「私も大丈夫です。」

二人は息絶え絶えで答える。

「無理はしないように。戦闘が困難だと思ったら、すぐに戦闘空域から離脱すること。」

後方で待機していた彩雲は再び攻撃隊とウィッチの誘導の為に前方へ出る。

「各機へ、もう直ぐピラミッドが見える。そうすれば後は君達の仕事である。」

彩雲の機長はそう告げた。

エジプト解放 中編（後書き）

予想より長くなるため、前回の後書きは無視しました。すみません。
次回も出来るだけ早く更新します。
感想と評価を宜しく。

エジプト解放 後編（前書き）

前回の続きです。解放作戦にしては戦闘が少ないと思いますが、そこらへんはすみません。

エジプト解放 後編

ネウロイとの戦闘が終わり、ネウロイの巢があるピラミッドの上空に到達した。

そこから大量のネウロイが出現してきた。

「戦闘機隊は突撃せよ、連中に海軍精神を叩き込んでやれ。」

岩本はそう言っ、編隊を率いて攻撃を開始した。

ゼロ戦は簡単にネウロイを落とせるが、シーファイアーは苦戦を強いられている。

「少佐とペリーヌさん、宮藤さんとリーネさんは戦闘機隊の援護をお願いします。残りは巢を目指します。」

「了解。」

坂本少佐を先頭に宮藤等は後に続いた。その間にミーナ等の巢を破壊する部隊は一時、高度を取って巢に近づいていく。

宮藤はゼロ戦の後ろに張り付いて攻撃するネウロイの後をとって攻撃した。ダダダダダと連射をしてネウロイは撃墜される。

「すまない、助かった。」

助けたゼロ戦のパイロットから無線でお礼を言われて、宮藤は守ることができたことを素直に喜んだ。

「リーネ、あの大型ネウロイを狙撃しろ。」

坂本の指示にリーネはライフルを構えて狙った。ドン、っと発射音が響いてネウロイの装甲をコアごと貫通した。

「数が多すぎますわ。」

ペリー又は敵に囲まれて集中攻撃を受けていた。

「仕方が在りませんわね。トネール！」

その瞬間ペリー又は体から電流が放出されて、周囲のネウロイは光る破片になっていった。

坂本の方も敵に囲まれてしまったが、すかさず愛刀を引き抜いてネウロイの装甲を叩き切った。

「さすが坂本少佐。」

ペリー又はボサボサの髪を何とか元に戻しながら言った。

岩本も既に13機を撃墜する戦果をあげている。

「残存勢力残り僅か。各機、最後まで奮戦せよ。」

岩本の言葉に戦闘機隊はより一層攻撃を続けた。

何とかネウロイを全滅させたが、シーファイアーは最早戦力にもならないほど数が減っていた為、一時空母へと帰還命令を下した。

その頃、ミーナ等はネウロイの巢の真下まで来ていた。

「皆、いつビームが来るか分からないから気をつけて。」

ビームが突然降って来るが、回避に成功してそのまま上昇してネウロイの巢の中に突入しようとした。

「各機、回避運動を行いながらネウロイの巢に突入して。」

だが、ビームが激しくて、なかなか近づく事が出来ない。あの回避の天才であるエイラでさえ回避するのに精一杯で近づけない。

「サーニヤさん、ビームを撃ってきている所にフリーガー・ハマーを撃ち込んで。」

「はい。」

サーニャはフリーガー・ハマーを構えて発射した。見事にビームの撃つてきている所に命中してビームが一時的に停まった。それを見逃さずにハルトマン、バルクホルンとエイラが突入した。

内部は雲が渦を巻いている外とは違い、雲が停まって見えている。そして、その雲の中心には水晶みたいに透き通る赤い物体がある。これがこの巢のコアである。

3人共、銃を構えてバルクホルンの指示で一斉に連射する。パリンとガラスの割れる音がして、コアは破壊された。その瞬間、一気に巢は無くなって青空が広がっていく。

「やった、エジプトは解放されたぞ。」

ウィッチや戦闘機隊は大喜びである。ミーナも安堵の溜息をもらし

「全機帰還します。」

「了解。」

ウィッチと戦闘機隊は空母へと戻っていった。

ブリタニアに戻るまで空母赤城ではウィッチと戦闘機隊の宴会を行った。ミーナは初めは許可を出さなかったが、他のウィッチから強い要望で許可を出した。まんざら、ミーナもそこで歌を歌うなどしたので参加をしたかったのが本音だろうと他のウィッチは考えた。

エイラはパイロット達の今後の運勢を占っていた。バルクホルンはパイロット達にカールスラントの規則をみっちり叩き込んでいた。宮藤は助けたパイロットと話をするなど楽しんでいた。

宴会なので酒も出たが、彼女等は未成年なので自分等が作戦前に空母に持ち込んだ飲み物で乾杯した。

だが、まだアフリカにはネウロイの巢が残っているが、こちらはストームウィッチーズ等、アフリカのウィッチ達の仕事なので彼女等は帰港した。

エジプト解放 後編（後書き）

なんとかエジプトの解放する話を書けました。次回から再び元の基地に戻っての話が続きます。感想と評価を宜しく。

扶桑皇国へ 前編

ミーナ中佐、坂本少佐、山本大將はブリタニアの総司令部へと出頭していた。

「エジプト解放はご苦労だったな、諸君にはしばらくネウロイとの戦闘は無いのでその間に休んでくれたまえ。」

ブリタニアの首相のチャーチルは意外な事を言った。

「それはどういうことですか？」

「観測班の話ではあと1週間はネウロイが攻めて来ないとのことだ。」

チャーチルは海軍相から首相になり、海軍を指揮していた時に何度も観測班に助けられているのでこの報告も信用していた。

「そこでだ、坂本少佐と山本大將には明日到着する扶桑からの補給が終わり次第、その輸送機に乗って一時扶桑へ戻って頂きたい。」

「何故ですか首相。」

山本は少し焦った表情になった。

「あなた方は日本という国から来た。話を聞く限りでは扶桑と全く同じ国のようなので正式に、形だけでも扶桑の艦隊にもなってもらいたい。」

「もちろん、今までどおり501航空団の所属艦隊になってもらうが、国籍が無ければいろいろと問題にもなるのでな。」

空軍総督官のトレマー・マロニー大將は付け加えた。

「わかりました。では明日に扶桑へと向かいます。」

その夜、連合艦隊旗艦の大和にて会議を行った。

「というわけで、私は明日に扶桑へと向かう。扶桑にいる間は艦隊指揮を井上成美大將に委任する。」

「しかし長官、本当に正しいのでしょうか？」

参謀の黒島亀人は言ったが

「わからないが、所属国籍が無いと面倒になるのも事実だからな。形だけでも所属してくれと言われたよ。」

全員は頷いたが、本音の所は納得できない者もいた。

会議を解散させて山本も自室へと入った。

（本当に我々は元の世界に帰れるのだから？第一、我々がこの世界に來たのはなぜだ？我々にこの世界で何をしろというのだ？）

山本はそんな事を考えながら眠った。

次の日、扶桑からの補給機が到着した。操縦手はお馴染みの佐藤武彦であった。

「扶桑から米を1t、農作物2t、梅干1？、リベリオンから小麦粉2t、トウモロコシ2t、カールスラントからジャガイモ500kg、補給弾薬を各国から200？を運んできました。」

富嶽には最大で20tの物を積める輸送機としてはかなり優秀な機体である。

補給物資を降ろしている整備員の隣では宮藤とリーネも手伝っている。そんな時、坂本少佐と山本大將が富嶽に乗り込んでいくのを見た。

「坂本さん、一体何処に行くんですか？」

「一時、扶桑へと戻るだけだ。」

扶桑と聞いて宮藤はうれしくなり

「私も連れていってください。」

宮藤は頭を下げてお願いした。

「いや、しかしだな」

「お願いします。」

（ここまで頼まれてはなー）

坂本は少し悩んだが、

「よし、急いで支度をして来い。」

宮藤はそれを聞いて急いで支度をして富嶽に乗った。

離陸予定は少し遅れたが、無事に飛びたつことが出来た。

「しかし宮藤、なぜ扶桑に戻ろうと思った？」

「私は一旦家に帰って、もっとしっかりさようならをしたいんです。それにお父さんのことも伝えたいので」

宮藤は最後の方は暗い表情で答えた。

（まずいことを聞いたかな？）

富嶽はその後大西洋を越えてリベリオン上空を越えてハワイへと向かった。なぜ、こんな大回りをするのかというと、欧州はネウロイに占領されて、アフリカもまだネウロイの巢が残っているからである。

陽気なハワイアン音楽が聞こえてきた。その後はリベリオンの国歌が流れる。

ハワイに着陸をして、燃料の補給を行っている間、坂本の案内で宮藤はハワイのオアフ島を回った。

扶桑皇国へ 後編

燃料補給や簡単な整備を終えて、富嶽は再び離陸をして扶桑へと向かった。

「坂本さん、ハワイはとってもきれいでした。」

宮藤は坂本の案内でハワイを少し回っただけでハワイの美しさに目を回してしまった。

「たしかにあの島は欧州の戦争の被害を受けていないしな。あそこは疲れた体を癒すにはいい場所だろう。」

坂本は1度、海軍の交流でハワイに訪れた事があり、ハワイのことは大体理解していた。そんな中山本は

（自分はあるちの世界では、あのきれいな島を焼き払おうとしていたのか。）

山本も駐米武官として渡米したことがあるが、ハワイには実際に行ったことが無かった。

「坂本さん、私は早く欧州の方もハワイみたいに平和な土地にしたいです。」

「よく言った宮藤。よし、帰ったら普段の練習メニューを2倍に増やそう。はっはっは。」

坂本は笑いながら言うが、宮藤は啞然としたが、
（ごめん、リーネちゃん。）

心の中で謝る宮藤であった。

扶桑皇国の土浦飛行場に富嶽はその巨体を下ろした。

「整備を頼む。」

佐藤飛行兵長が整備員に頼むと、自分は宿舎に戻っていく。

宮藤はしばらく行った所にバス停があるので、それに乗って横須賀まで帰れると坂本少佐に教えられたので、出発まで家で家族と話を

する時間をもらえた。

坂本は山本と共に迎えに来た土方の車に乗って帝都「東京」に向かった。

「土方圭介二等兵曹です。普段は坂本少佐の従兵をしています。いまは補給物資など欧州支援物資の管理等をしています。」

土方は山本に自己紹介をした。

「こちらこそ、大日本帝国連合艦隊司令長官の山本五十六です。」

山本も土方に自己紹介をする。

車を走らせること50分、帝都「東京」へ到着した。そして皇居へと到着した。

坂本も天皇に会うのは初めてでさすがに緊張を隠せない様子であるが、山本は何度か天皇に謁見したことがあるので特に緊張はしていない。二人は皇居へと入っていった。

その頃、坂本少佐の苦勞を知らない宮藤はバスで横須賀へと向かっていた。

「坂本さんは今頃何をしているんだろう？それに山本さんって一体どんな人なんだろう？」

宮藤はまだ殆ど山本大将のことを知らないでいた。

（今度、機会があつたら聞いてみよう。）

つと、宮藤は考えながら海を見ていた。

「つまり、報告のあつた通り君達の艦隊と乗組員は別次元から来たのだね。」

いきなり裕仁天皇が言うので山本は呆氣にとられるも

「はい、私達はこちらの世界でいうリベリオン合衆国に宣戦布告を

するべく集結していた所を謎の台風によってこちらの世界に飛ばされました。」

裕仁天皇は少し考えるも、隣の男が

「では、あなた方の艦隊は我が扶桑皇国の所属艦隊として501航空団の配属となつて任務に従事してくれたまえ」

山本はその男を見て驚愕した。なんと初代連合艦隊司令長官の伊藤祐亨中将だった。つといても、写真でしか見たことが見た事が無いのでどこかまでは分からないが。

皇居を出て、土方の運転で土浦に戻ったが出発は明日なので、宿舍を用意されていたからそこに戻つて山本はしばらく一人になった。

その頃宮藤は自分の家に戻っていた。

「えへへへ、半年振りに帰ってきたんだ。」

そう言つて家に入つていく。

「おかーさん、おばーちゃん。」

「芳佳ちゃん、久しぶり。」

家にいて初めて出迎えたのがみつちゃんだった。

「みつちゃん、どうしてここに？」

「あなたのお母さん聞いて急いで来たんだ。」

久しぶりあつて、二人はしばらく話して、夕方あたりになつて別れた。

そして、親にお父さんの事を話した。

「そう、それは辛かつただろうね。」

「うう、おかーさん、あの手紙が届いたからもしかしたらと思ったけど、やっぱりお父さん死んじゃったんだ。」

宮藤は半分泣きながら話した。

その晩、宮藤はなかなか寝付けずに2時まで起きててしまった。

次に日、宮藤は坂本と山本が待つ、土浦飛行場に向かうバスに乗る

ためにバス停に来ていた。

「じゃあお母さん、お婆ちゃん。行ってきます。」

そして、家族と別れてバスを待った。そうしているとみっちゃんが走ってきた。

「芳佳ちゃん、もう行っちゃうんだね。」

「うん、ごめんねみっちゃん。もう少し一緒に居たかったけど、ブリタニアでも皆が待っているし。」

「ううん、芳佳ちゃんが決めたことだもん。私は応援してるよ。必ず欧州を平和にして戻ってきてね。約束だよ。」

「うん、みっちゃん。必ずその約束守るよ。皆と一緒にならどんな事だってできるもん。」

「戻ってきたらまた中学校に復帰するの?」

「坂本さんがうまくやってくれるから心配するなって言ってたから。」

「そんなこんなで話している内にバスが来た。」

「じゃあねみっちゃん。今度会うときは平和な世界で会えるからね。」

「楽しみにしてるよ。芳佳ちゃん。」

バスのドアは閉まり、出発をした。

土浦飛行場に着くと、滑走路の脇には坂本少佐が居て富嶽の物資積み込みを見ていた。

「坂本さん。」

「おお宮藤か、家族と久しぶりに会えてどうだった?」

「はい、とってもよかったです。いろいろと話も出来ましたし。」

「そうか。もうじき終わるから富嶽に乗っていいぞ。」

そう言われて宮藤は富嶽へと乗った。しばらくして山本と坂本も乗ってきたので、富嶽は滑走路に移動して離陸した。

扶桑皇国へ 後編（後書き）

とりあえずP V 1 0 , 0 0 0突破しましたが、感想が一向に増えません。どんなことでもいいのでお願いします。なお、裕仁というのは昭和天皇のことです。ちなみに、伊藤連合艦隊司令長官は1914年に亡くなっています。

任命

ブリタニアに戻るのは夜になってしまった。夜では月明かりだけで非常に飛ぶのは難しい。

「坂本さん、本当にこの機は基地に向かっているんですよね？」

「ああ、もうじき聞こえてくるだろう。」

そう言われて宮藤は疑問に思うが、しばらくしてきれいな歌声が聞こえてきた。

「あのう、坂本さんは何か聞こえませんか？」

「これはサーニヤの歌だ。基地に近づいたんだな。」

宮藤は窓の外を見ると、サーニヤが横へ並んで飛行をしていた。

「我々を迎えに来てくれたんだな。サーニヤはこういうことが出来るからな、普段は夜間哨戒に就いて誘導や夜間迎撃を行っている。」

宮藤はサーニヤの方を向いて

「ありがとう。」

するとサーニヤは頬を赤く染めて、雲の中に隠れてしまった。

「サーニヤちゃんって、なんか照れ屋ですね。」

「まあ仕方が無い、普段は皆と生活習慣が違うから少し気の弱い所があるからな。」

そんな時サーニヤから通信が入った

「シリウスの方角に所属不明の飛行物体を探知、これより接触、迎撃します。」

「わかった。無理をするなよ。」

サーニヤはフリーガー・ハンマーを構えて数発発射する。着弾した所は爆円をつくり雲に穴が開く。

（反撃してこない？）

こんなに撃つと普段のネウロイはビームで反撃してくるのだが、今回ののは全く反撃してこない。

「サーニヤ、もういい。」

「でも」

「この機を守って帰還しよう。もう魔力も残っていないんだろう。」

坂本の言葉にサーニヤはこれ以上の追撃をやめて輸送機の横に行き、護衛の任に就いた。基地ではサーニヤの知らせを聞いてバルクホルン等が現場に向かった。下のほうは雨であり、上よりも飛び難かった。

「ひどい雨だな。輸送機はうまく着陸できるのかよ？」

エーリカは疑問を投げかけるが、誰も答えなかった。しばらくして輸送機が見えたのでエーラは少しスピード上げて

「サーニヤ無事か？」

「うん、エーラ、大丈夫よ。」

輸送機の左右にウィッチ等は展開して護衛をしながら帰還した。

ミーティングルームにはウィッチ全員が集まっていた。夜だけあって、皆が寝巻き姿である。

「では今回のネウロイはサーニヤ意外に誰も見ていないんだな？」

「ずっと雲の中にいて出てこなかったよ。」

「でも、反撃してこないってのも気になるな。」

「そこで、次回から夜間戦闘を想定したシフトを考えているの。」

ミーナは突然話を切り替えたので隊員は驚いた。

「まずサーニヤさん、それと宮藤さん。貴方達を夜間専従班に任命します。出撃待機には私と坂本少佐が就きます。」

サーニヤは慣れているが、宮藤は全くの未経験であり突然の任命に驚いた。

「え？なぜ私もなんですか？」

「今回の戦闘を見ているからな。」

坂本は宮藤に指摘する。

「私はただ見ていただ、うわっぷ。」

突然エイラが宮藤の頭を抑えて拳手をした。

「はいはい、私も専従班をやる。」

「それではエイラさんも含めて3人が専従班ですね。指揮の方はエイラさんをお願いするわ。」

ミーナはすぐにエイラを加えた。尤も、エイラがこう出ることは既に予測していた。

「すみません、私がネウロイを取り逃がしたばかりに。」

サーニヤは頭を下げて芳佳に謝った。これに動揺した芳佳は

「ううん、サーニヤちゃんが悪いんじゃないんだよ。」

（うーん、サーニヤちゃんとはこの間の作戦で一緒だったけど、まだよく分からないしこの任務で仲良くなっておこつ。）

つと、心に決めた芳佳であった。こうして謎の夜間ネウロイを倒すための夜間専従班が臨時に編成された。

任命（後書き）

この任務である超有名なナイトウィッチを出そうと思います。あくまで思うだけなので本当にでるかは分かりません。

夜間哨戒前の交友

次の日、食堂には大量のブルーベリーが置かれていた。

「あら、ブルーベリー？ でも、何でこんなに沢山？」

ペリーヌはブルーベリーを見つけるなり疑問に思う。

「私の実家から届いたんです。ブルーベリーは目に良いんですよ。」

リーネはもう一束ブルーベリーの籠を持ってきて答えた。

それが朝の食堂に並んだ。

「いただきます。」

そう言うなりエーリカはブルーベリーを食べ始めた。

「こら、エーリカもう少し上品に食べんか。」

あまりのひどい食べ方にバルクホルンは呆れ顔で注意をする。

「おいしい」

サーニヤは小声で言う。皆ブルーベリーを気に入ったようだ。

「よし、朝食が済んだところで、お前達は夜に備えて寝ろ。」

いきなり夜間専従班が呼び出されたと思うと、坂本ははつきりとそ

う言った。

「え？」

さすがに呆気にとられた。そういうわけでサーニヤの部屋に入り、部屋を暗くした。

「ごめんねサーニヤちゃんの部屋なのに暗くしちゃって。」

「ううん、いつもの事だから。」

「ねえ、サーニヤちゃんとエイラさんの故郷って何処だっけ？」

「私、スオムス。」

「オラーシャ。」

「えーと、それって何処だっけ？」

「スオムスはヨーロッパの北の方、オラーシャは東。」

「ヨーロッパって殆どがネウロイに」

「うん、私の居た町もずっと昔に陥落している。」

サーニヤは少し悲しそうな声で言った。それから三人は眠った。

「夕方だぞ、起つきろー。」

ルッキーニの言葉に3人は目覚めた。部屋から出ると。

「うわー、汗でべたべただよ。」

「じゃあ、汗かきついでにサウナに行こう。」

「サウナ？」

「ふーん、宮藤はサウナを知らないのか。」

エイラは満面の笑みを浮かべる。

「これじゃあさっきと変わらないよ。」

サウナに来るなり宮藤は中の温度に驚いた。

「スオムスじゃあ風呂よりサウナなんだぞ。」

そんなこんなでサウナに入った宮藤はエイラに連れられて、外にある水風呂の方に行った。

「こっちこっち。」

「ちょっとエイラさん、待ってくださいよ。」

「気持ちいだろ？」

「確かにひんやりしてて気持ちいけど。」

そんな時、またサーニヤのあの歌が聞こえてきたので、エイラと宮藤は岩陰でその歌を聞いていた。するとサーニヤは2人に気づいた。

「あつ、ごめんサーニヤちゃん。」

「なんであやまるの？」

「いや、邪魔しちゃったから。その、その歌は素敵だね。」

「これはお父様が私の為に作曲してくれたの。」

しばらく話をして3人は夜間哨戒の為、ハンガーへと向かった。

遭遇

3人はハンガーにてユニットを履く。そして、滑走路へと出た。

「く、暗い。夜の空がこんなに暗く感じるなんて。」

宮藤が言うのも尤もである。なぜなら、滑走路には着陸灯があるのでいいが、空は雲っていて全く視界が無かった。

「夜間飛行初めてなのか？」

「無理ならやめる？」

エイラとサーニヤは心配そうに見ている。宮藤は震える手を見ながら

「手、繋いでいいかな？サーニヤちゃんが手を繋いでくれたら、きつと大丈夫だから。」

サーニヤは頬を赤く染めた。その横には、なんだこいつつと言いたげなエイラの顔があった。サーニヤは言われた通りに手を繋いだが、これを見たエイラは宮藤の反対側に行き手を持つと。

「さっさと行くぞ。」

そう言つてエンジンをかけた。サーニヤもこれに答えて、エンジンをかけた。

「ちよつ、ちよつと待つて。心の準備が。」

宮藤の抗議を無視して離陸をした。既に連合艦隊も謎のネウロイに備えて周囲に航空機を飛ばして索敵を行っている。

「絶対に手を離さないでよ。絶対だからね。」

「大丈夫よ、もう少しで雲の上に出るから。」

雲の上に出て宮藤は気が楽になり、2人にあることを告げる。

「今日はねえ、私の誕生日なの。」

「え?」

「なんで黙ってたんだよ?」

「私の誕生日はお父さんの命日でもあるの。なんだかややこしくて皆に言いそびれちゃった。」

エイラが横に並んで来て。

「馬鹿だなー。そういう時は楽しいことを優先するもんなんだぞ。」

サーニヤも横に並んで来て。

「宮藤さん。耳を澄まして。」

しばらくすると、インカムから音楽が聞こえてきた。

「えっ、これってラジオ?」

「そうよ、夜飛ぶときはいつも聞いているの。夜は電離層が静まるから良く聞こえるの。」

実際、地球の裏側までのラジオを聴くことができるという理論は存在している。つまり、日本からでもイギリスやドイツなどの音楽を聴くことができる。

それをしばらく聞きながら飛行していると。

「ねえサーニヤちゃん、どうして教えてくれたの？」

サーニヤは頬を赤く染めた。それを見たエイラは換わりに

「あんな、今日はサーニヤも」

その瞬間、インカムから声が入ってきた。

「こちらはカールスラント空軍のハイデマリ・W・シュナウファ―大尉です。付近にいるナイトウィッチへ救援を要請します。」

「！」

「サーニヤ、場所は分かるか？」

「ここから、東へ5キロ程度の位置。ネウロイの反応は前回の型と一致。」

「こちら、JW501所属のエイラ・イルマタル・ユーティライネン。直ちに援護に向かいます。」

そして、3人は全速力で向かった。そこには、ネウロイとの戦闘を続ける1人のウィッチが居た。

「貴方達がJW501のウィッチですか？」

「はい。」

「援護に来てくれてありがとう。でも気をつけて、あのネウロイはかなり手ごわいわ。」

そう言うと、4人は急いで散開した。まず、攻撃を仕掛けたのがエイラだった。エイラはネウロイの上から逆落としをかけて急降下した。

「これでも喰らえ。」

必死に銃を連射するが、コアまでは達しなかった。ハイデマリーも急降下に入り、銃を撃ったが、此方も効果なし。

「なんて硬いんだ。」

サーニヤはフリーガー・ハマーを構えたが、構えた時の射撃による集中でビームへの反応が遅れた。なんとか直撃はしなかったが、片方のユニットが吹っ飛んだ。

「サーニヤ。」

「サーニヤちゃん。」

エイラと宮藤は急いでサーニヤの元に向かう。ハイデマリーは3人

にネウロイを近づかせないように食い止めていた。

「サーニヤ大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫。」

サーニヤは宮藤に背負われて、武器はエイラに渡した。エイラはフリーガー・ハマーを構えてネウロイに向かって構えた。

「大尉、どいてくれ。」

その瞬間、エイラは引き金を引いた。ハイデマリーは既にネウロイから離れている。発射されたロケット弾はまっすぐネウロイに向かっていった。ドーン、音と共にネウロイのコアが現れた。それを見たサーニヤは宮藤の銃を構えて連射をし、これを破壊した。

「やったよサーニヤちゃん。」

宮藤は喜んだ。そして、ラジオに耳を戻すと聞き覚えのある音楽が流れていた。そう、サーニヤのあの歌である。

「これは、お父様の歌。」

サーニヤはそう言うと、もう片方にあるユニットのエンジンを回して上昇した。

「そうか、このどこかの空から届いてるんだ。すごいよ、奇跡だよ。」

「いや、そうでもないぞ。今日はサーニヤの誕生日なんだよ。正確

には昨日かな。」

いつの間にか日付を跨いでいた。

「えっ、じゃあ私と同じ。」

「サーニヤの事が好きなら誕生日を祝うことなんて当然だろ。」

「あー、今日はあなた方2人の誕生日なんですか？」

状況が飲み込めないハイデマリーは質問をする。

「はい。」

「わあー、おめでとうございます。」

「おめでとう、サーニヤちゃん。」

「貴方もでしょう。おめでとう宮藤さん。」

「おめでとな。」

「うん。」

ハイデマリーと別れた3人は帰還をした。

遭遇（後書き）

ふう、今回は会話をメインと思って書きました。アニメの6話にオリジナルも加えて書きましたが、大まかなのは一緒です。

ブリタニア防空戦 前編

「あーあ、暇だな。」

朝早く起きすぎたエイラはなんとなく廊下を歩いていた。

「お、エイラじゃないか。ちょうどよかった、ちょっと訓練に付き合ってくれないか？」

廊下ではったりと坂本少佐にあった。

（うー、面倒だけど・・・暇つぶしにはなるか。）

「良いですよ。」

というわけで、滑走路のほうまで行き、坂本少佐に木刀を渡された。

「準備はいいか？」

「いいよ。」

先手必勝と言いたげに坂本少佐は間合いを詰めて一気に切りかかる。それをエイラは受け止めて、攻撃の一手を考える。

「ここだ。」

とつさに、少佐の脇腹を目掛けて木刀をふる。だが、さすがは刀を使い慣れているだけあり、簡単に防御された。しかも、カウンターまで掛けてくる。

「さすが未来予知を使えるだけあって一番手ごわい。」

かれこれ30分このような駆け引きをする。そんな時起床を告げるラッパがなった。

「よし、ここまで。」

坂本はエイラから木刀を受け取った。とうのエイラは息が上がっている。

―食堂―

「はあー疲れた。」

朝の坂本との組み手で早くも疲れてしまった。

「エイラ、大丈夫かよ？」

隣に座ったシャーリーが尋ねてくる。

「ああ。しかし、坂本少佐の訓練があんなに大変だったなんてない。宮藤とリーネは良く耐えられるよ。」

台所で料理を作っている宮藤とリーネの方を向きながら言う。

出された食事を皆が食べ終わった時にミーナ隊長は

「皆さん、食べ終わったらミーティングルームへ行ってください。」

それを聞いて隊員達はミーティングルームへ向かった。

- ミーティングルーム -

「今日の午後にネウロイが攻めてくるという予報になっています。それまでは各自、鋭気を養っておいてください。」

「あー宮藤とリーネ、今日は訓練を中止する。しっかり休んで午後からの戦闘に備えろ。」

「了解。」

- 連合艦隊旗艦 大和 作戦会議室 -

「ウィッチ隊からの報告で今日の午後にネウロイが攻めてくるそう
だ。」

「長官、その情報はあてになるのですか？」

あいかわらず情報戦の戦い方を知らない将官等である。山本は溜息を吐いて

「いいかね、情報とは確実ではない。だが、それがなければ我々は何も出来ない。作戦を立てることも、戦闘を行うこともだ。情報戦とはそういうものだ。」

史実、日本とアメリカは情報戦についての考え方が根本的に違って

いた。日本はどうでもいい人間を情報室においたが、アメリカでは情報を得るために暗号を傍受して解読したりなど必死になって暗号解読に力をいれた。

「では、あくまで情報を信じろということですか？」

「そうだ。そこで数隻の潜水艦でドーバー海峡を哨戒させて発見に務めさせる。」

「了解しました。今現在出撃できるのは8隻です。」

「直ちに出撃させる。」

－午後 1：30分－

哨戒中の潜水艦 伊25潜水艦

「電探に感あり。」

「潜望鏡上げ。」

潜望鏡が上がり、艦長の田上明次中佐は潜望鏡を覗いた。

「なんだ、あのネウロイの数は。」

ネウロイは潜望鏡には収まりきれない程沢山飛来してきた。

「旗艦に入電、『我、ブリタニアに向かう多数のネウロイ視認。数

は大中小合わせて200クラス。なお、大型ネウロイの中には空母型あり。」

「旗艦 大和」

「ウィッチ隊に報告をしてやれ。」

「了解しました。全員直ちに出撃。」

連合艦隊からの伝令兵から報告を聞くと、ミーナは直ちに出撃命令を下した。

「空軍省にも連絡。本土にいる全軍を出撃させる必要があります。」

その連絡を聞いて空軍省にいるマロニー大將はブリタニアにいる全てのウィッチと航空部隊に出撃命令を下す。

（くそ、ネウロイの奴等め、我々の研究が終えたら貴様等を即刻殲滅してやる。）

マロニー大將の謎めいた思惑が判明した。

そんなことは知らずに、501航空団と連合艦隊の艦載機、ブリタニア中にある航空部隊はネウロイ殲滅させようと向かっていった。

ブリタニア防空戦 前編（後書き）

なんだかんだで20話までできました。だんだん後半に近づいてきました。次回はこの大量のネウロイとの戦闘です。

ブリタニア防空戦 後編（前書き）

前回の続き。

ブリタニア防空戦 後編

「こちらJW501航空団司令のミーナ・デイトリンデ・ウィルケ中佐です。」

<こちら、カールスラント空軍JG27第4飛行中隊隊長のスタン・レーデルです。敵情が新たに入っています。>

「どんな事？」

<そつ、それが、敵は1000近くいるとの事です。>

「なんですつて!？」

ミーナは非常に驚いた。たしかに潜水艦の潜望鏡は狭いので間違っても仕方がないが、あまりにも多すぎる。

「どうするミーナ?。」

バルクホルンが隣について指示を待っている。

「仕方がないわ。全機へ通達、ブリタニア本土へは一機たりとも入れないで。」

しばらく飛んでいると、黒い黒点が現れ始める。近づくにつれてそれがネウロイだと分かる。

「あれは、スオムスからの報告やカールスラントで出てきたタイプ?」

実際に目の前にいるのはラロス改やトゥーパリフ、後方にはディオミディアが展開している。さらに後方には空母型のネウロイが三体いて、ラロス改を出撃させている。

「でも、少し違うような気がするけど。」

確かに、報告されていたより、若干速度が速くなっている。

「全機へ、攻撃開始。」

先導するミーナの指示を受けて、全航空隊は散会、攻撃態勢に移る。

「トゥルーデとエーリカは空母型をお願い。」

「おっしゃあ、任せろミーナ。来いハルトマン。」

「もう、めんどくさいなー。」

「本土防空に面倒もなにもあるかー。そのような精神だから祖国を守れないのだ。」

「また始まったよ。先に行くよ。」

「おい、こらハルトマン。」

ハルトマンはバルクホルンを置いて先に空母型へ突入する。

「ウィーラ、これより敵に一撃離脱をかけます。」

ウィーラというウィッチはディオミディア目掛けて急降下の体勢に入る。

「だめ、ディオミディアは後方から狙って。」

ミーナは警告するが、時既に遅く。ウィーラは急降下に入った。そして、モロにネウロイのビーム喰らい、ユニットから火が出て落下をしていく。ウィッチは魔法障壁で体を守っているため、これぐらいで死ぬことはないが、明らかに本戦闘への復帰は不可能である。

「連合艦隊へ、戦闘が終わり次第駆逐艦を当海域へ派遣して、脱出したパイロット及びウィッチの救助をお願いします。」

<了解しました。>

次々とネウロイが落ちていくが、それに見合って、此方の損害も増える一方である。宮藤はミーナの警告どおりにディオミディアの後ろへ回り、機銃を連射する。

「お願い、落ちてー」。」

かなりの弾薬を消費するが、ようやくコアまで届いてネウロイは光る破片に姿を変える。

<こちらはバルクホルン、空母型を2体落としたが弾薬が無い。至急応援を。>

救援要請を受けて、数人のウィッチ等が行くが、向かったウィッチ等も殆ど弾薬が残っていない。

「ここまでね。」

ミーナが諦めかけたその時

<こちらは富嶽、現在高度5000を飛行中。お嬢さん方、弾薬は要らんかね？>

「その声は佐藤飛行兵長。」

坂本は安心したような声で言う。

ミーナもこれを聞いて、少し微笑んでから

「弾薬の切れた者から上空の富嶽に向かって補給を受けて。」

前代未聞の空中補給を受けに、ウィッチ等は上昇をする。補

給を受けた者から順に、最後の空母型に急降下をかける。他のネウロイはというと、情けないことに護衛すべき空母型を残して撤退してしまっている。

（護衛の無い奴を落とすのは心もとないが、これは戦争、ましてや祖国を焼いた敵。問答無用）

最後にバルクホルンが一撃の怪力を食らわせてネウロイは破壊・・・というよりは叩き割った。

帰還していく部隊は出撃するときよりもかなりの人数を失っていた。

大半は生きているが、しばらくは戦線復帰は不可能な者が殆どなので今後は大規模な作戦は取れないだろう。尤も、ネウロイ側も空母型3体をはじめ、多数の味方（そんな概念があるのか不安だが）を失っているので、しばらくはよくても威力偵察をするぐらいだろうと上層部は考えた。

こうして、大量のネウロイによる大規模侵攻作戦は大失敗に終わった。脱出したパイロットやウィッチ等は要請どおりに駆逐艦が出撃、海面に浮いている味方を全員救助を成功させた。

訓練 前編（前書き）

前回の戦闘による扶桑からのパイロットの補充、訓練の様子を書きます。

訓練 前編

前回の戦闘にて、かなりの航空機とストライカーを失い、連合艦隊の航空兵力も損害を受けていた。

「長官、これ以上の損害はもはや我が海軍の航空機全てを失うも当然です。パイロットや機体の補充が無ければ我々は戦えません。」

大西瀧次郎は前回の戦闘の損害を書いた資料を見ながら山本に訴える。

「それは分かっている。だから、今から行われる上層部との会議で言うつもりだ。」

「パイロットの補充の方も強く言って下さい。」

大西は念を押して言う。

・ウィッチーズ基地 ミーティングルーム・

「しばらくの間はネウロイは攻めて来ません。だから、皆しっかりと鋭気を養っておいてください。」

ミーナ隊長は相変わらずの笑顔で一同を見渡して言った。そこに、

「ミーナ隊長、総司令部にそろそろ向かわれる時間ですよ。」

一人の整備士が入ってきて伝えた。

「ありがとう。直ぐ行くわ。」

ミーナは整理した書類を持って、外で待っている軍用車に乗りこみ、総司令部へと向かった。

- 総司令部 作戦会議室 -

各隊からの司令官、及び空軍大将のトレヴァー・マロニーが着席をして会議が始まった。

「早速ですまないが、空軍予算を新兵器開発の為に削減することが決まった。」

マロニーは早速悪いニュースを一同に告げた。

「そんなー、それでは困ります。」

「そうですね、航空機の生産を減らしたらこの前の戦闘で失った機体の補充が出来ないじゃないですか。」

程度は違うが、各司令官は愚痴等を零す。そんな訳で会議は難航していた。つが、山本はその会議を聞いていて

「予算の方は仕方ありません。ですが、我が連合艦隊へ航空機、パイロットの補充をしていただきたい。それが出来るのなら予算を下げて構いません。」

その言葉を聴き、各司令官は

「なら我々も航空機やストライカーの補充をしてくださいよ。」

「そうだそうだ、補充さえされるなら、我々だって構わない。」

どうやら全員一致であるようだった。

「わかった。航空機やユニットの補充は約束する。それと連合艦隊については既に扶桑に伝えている。一流のパイロットを寄越すそう
だ。機体もリベリオンのグラマン社が大量生産をしている。」

「でしたら、我々は構いません。」

なんとか、難航していた会議は山本の一言で解決できた。

- 帰りの軍用車の中 -

「でも驚いたわ、あの中を見事に解決するなんて。」

ミーナは驚いた表情で山本に言う。

「いえ、いつも我々の会議があんな感じでして、必ず意見が分かれるんですよ。だから、司令である私がその場を宥めているのですから。」

その後、二人は501空の成り立ちや山本等の世界がどういうものなのかを話しながら基地へ向かった。

- 連合艦隊帰還 戦艦大和 作戦会議室 -

「なんとか補充機とパイロットは確保できた。後は彼等の訓練と我々との連携機動等の習熟させるだけだ。」

「そのことですが、明日ウィッチーズ等と共に模擬空戦を行うよう連絡しました。先ほど許可が下りましてそこで一緒に訓練させればよいかと思います。」

「分かった。ではそのようにしておこう。それで訓練場所は？」

「我々で言うアイルランド沖です。」

「あそこは安全だから大丈夫だろう。」

山本は安堵の溜息をしながら言った。

訓練 前編（後書き）

次回は訓練です。感想と評価を宜しく。

訓練 中編（前書き）

前回の続き。ちなみに、この話にはウィッチーズ隊との模擬戦はありますが、ネウロイとの戦闘はありません。

訓練 中編

- 次の日 - 空母機動部隊旗艦 赤城飛行甲板

ブウウンっと、轟音響かせて扶桑皇国の補充パイロットが見えてきた。

「あれが扶桑からのパイロットですか？ なかなか練度が高そうなパイロットですね。」

南雲司令長官は隣に居る源田航空参謀に言った。

「はい、なんでも山本長官が仰るには一流パイロットとの事ですから。」

「わかった。ところでウィッチーズ隊のほうは？」

「空母加賀に既に乗艦しています。ユニットの方も積み込みを完了しています。」

その間に補充部隊の1番機が着艦体勢に入り始めた。

「そのまま、ゆっくりと降下して来い。」

ドピュツと音がして、1番機が鮮やかな三角着地を決める。続き、2番機 3番機と続々着艦をしていく。

「見事なものだな。全機が三角着地を決めるとは」

南雲はいくら言われているからといって、内心は非常に驚いていた。そこへ、先程の1番機のパイロットが艦橋に上がってきて着任の挨拶をする。

「私は横須賀海軍航空隊第203航空隊隊長の加島信行中尉です。かしまのぶゆき扶桑皇国からこの艦隊へ補充の任を任されて参りました。」

そして、見事な敬礼をする。これを見て南雲も

「私は連合艦隊第一航空艦隊司令の南雲忠一中将です。支援に来てくれて感謝します。」

「私は第一航空艦隊の航空参謀の源田実中佐です。」

二人は挨拶を終えて

「よし、訓練に参加する艦隊は出撃。」

- 参加艦艇 -

第一航空艦隊より 訓練部隊の洋上補給や輸送任務を担当

第一航空戦隊 空母 「赤城」 「加賀」

第二航空戦隊 空母 「飛龍」 「蒼龍」

第七駆逐隊 駆逐艦 「曙」 「潮」 「漣」

第二三駆逐隊 駆逐艦 「菊月」 「夕月」 「卯月」

第一艦隊より

第一航空艦隊の護衛と哨戒を担当

第三戦隊 戦艦

「金剛」

「榛名」

「霧島」

「比叡」

第六戦隊 重巡

「青葉」

「衣笠」

「古鷹」

「加古」

以上が参加する艦艇です。

出港した艦隊はドーバー海峡を北上、ブリタニア北方を回って陸に沿ってそのまま西方した。

「長官、この海域は穏やかですね。丁度我々は経度0°を進んでいます。」

護衛する艦艇はどれも30ノットを越しているので移動は素早かった。

だが、アイルランド沖に入った。着いたのは夜なので、一時錨を下ろして朝になるのを待つことにした。

「明日はいよいよ、我々と補充パイロット、ウィッチーズ隊との模擬戦ですね。パイロット等はみな腕が試せると喜んでいます。」

「攻撃隊や爆撃隊にもしっかりと訓練させてやらんと、腕が落ちてきてしまうぞ。」

「御心配なく、ブリタニア海軍が喜んで標的旗を貸してくれました。

それで訓練をさせましょう。」

「なかなか素早いな航空参謀。」

会話をしていた、二人とも眠くなったので自室に戻って寝ることにした。

訓練 中編（後書き）

またまた前回の後書きを無視した投稿ですみません。
それでは感想と評価の方を宜しく。

訓練 後編

朝の赤城の飛行甲板は忙しかった。訓練をするパイロットの為の零戦が並べているからだ。

「整備兵、機体の調子の方はどうだ？」

「はい、今日も機体の方は良好です。燃料の方もオクタン価が高いのでエンジンとの相性も抜群です。」

「そうか、宜しく頼むぞ。」

「お任せください。」

今日の飛行訓練の隊長を務める坂井三郎（坂本少佐の元ネタの人）
一等飛行兵曹が整備兵に機体の調子を聞くと、出撃待機所に戻って
いった。

- 加賀 - 飛行甲板

ミナ中佐は加賀の壇上の上に上り

「皆、今日は海軍航空隊との訓練、すなわち模擬戦の日です。訓練だからといって気を抜かないようにしてくださいね。」

ミナは相変わらずいつもの笑顔で言う。

（気を抜いてやったらその笑顔がいわゆるブラック・スマイルに変わるんだろうなー。）

シャーリは心の中でそう思うのであった。

9時58分

赤城の飛行甲板では零戦がエンジンを回して出撃準備を整えていた。甲板の帆柱にゆっくりと旭日旗が上っていく。

「出撃用意よし。」

そう言つて坂井は旭日旗を見る。それが、下り始めた。

「坂井機、発艦します。」

エンジンを唸らせて零戦が甲板を滑走していく。その脇には整備兵などが帽を振って答えている。坂井機に続いて、次々と零戦が発艦していく。

- 加賀 - 飛行甲板

「こちらスピードのエース、発艦します。」

自分の事をスピードのエースと言うのは久しぶりだと感じながら発艦していく。それに続きほかのウィッチも発艦していく。

零戦の搭載機銃とウィッチーズの持っているのは全て訓練用のペイント弾である。ルールは単純で相手にペイント弾を当てれば撃墜である。

高度3000で両方とも編隊を組みなおした。零戦隊とウィッチーズ隊は共に11機、3機を基本に1つだけ2機の編隊を組んだ。

しばらく飛行をして双方がすれ違った。その瞬間、模擬戦が開始された。ウィッチーズ隊は早くも零戦の後方に回り込んで距離を詰め始めた。零戦は加速して一気に上昇を始める、これにウィッチーズ隊は釣られる。零戦は急激に減速をして左横転をした。日本海軍航空隊の伝家の宝刀、左捻りこみである。

「どうだ、これぞ訓練で培った機動だ。」

坂井はそう言うのと機銃を連射する（もちろんペイント弾である）

「全機散開、個々に相手をして。」

ウィッチーズ隊は攻撃をかわして、それぞれが自分の目標と決めたものに向かっていく。そしてエイラの後方に付いたパイロットは

「なぜ後ろをとったのに回避機動をしないんだ？」

そう思いながらも機銃を連射する。だが、エイラはこれを最小限の全く無駄のない機動で回避する。そして、右旋回を始めた。これについていくパイロットは

「しまった。」

エイラは零戦が右旋回に弱いことを知っていた。そしてそのまま急降下に移行する。パイロットは頭では分かっているがつい釣られてしまう。エイラは急上昇に移るが、速度の付いてしまった零戦はこれに追いていけなくて、あつさりと後ろに入られた。

「いいパイロットだが、残念だけどその機体の弱点は分かっているんだよね。」

その上、未来予知まで使えるエイラを落とす事などそうそうできるわけがない。エイラは機銃を撃った。それは、まるで零戦に吸い込まれていくかのように命中する。

「一機撃墜。サーニヤを助けに行くか。」

だが、サーニヤはあつさりと撃墜していた。

「サーニヤ凄いじゃないか。」

「エイラも撃墜したんでしょう。宮藤さんとリーネさんが苦戦しているみたいだからエイラはリーネさんをお願い。」

「あつ、ああ分かった。」

エイラはリーネの方に向かって、サーニヤは宮藤の方に向かって飛行した。

サーニヤは宮藤と何とか合流する。それを見たパイロットは

「くそ、もう撃墜された奴がいるのか。」

そしてサーニヤは零戦の弱点を突く機動を行う。宮藤もそれについて行く。

「なぜ、彼女等は零戦の弱点を知っている？」

それは、以前エイラとサーニヤは一度零戦を触っていた。そして、装甲の薄さと巨大な補助翼を見て弱点を知っていたのだ。すなわち、急降下での性能が悪いことや高速時の旋回性能の悪さに気づいているという事だ。

「仕方がない。なんとか左旋回戦に持ち込もう。」

パイロットはサーニヤ等の機動を無視して左旋回を始める。

「サーニヤちゃんどうする？」

「仕方がないわ宮藤さん。」

そう言つてサーニヤと宮藤は零戦の左旋回にのる。だが、徐々に速度を上げて高速域に入った所で

「まずい。」

パイロットは気づいたが、もう遅くて後ろに回られ機銃を撃たれた。

「これでやっと1機だよ。ありがとうサーニヤちゃん。」

サーニヤは頬を赤く染めて照れる。坂本を除く全員が既に撃墜していた。

「あとは美緒だけね。」

「多分、助けに行っても『手出し無用』と言われるだろうしな。」

それを裏付けられるかのように無線がはいる。予想通り

「手出し無用。」

であった。だが、相手も相手である。坂本少佐の相手しているのは坂井1飛曹であるから苦戦していた。

（このパイロットはなんて技量なのだ。後ろに付くことができん。）

坂井も

（彼女は全く隙がないな、中国軍機と比べ物にならない。）

つと、双方が思っていた。坂井機は一気に勝負を賭けようと一直線に坂本に向かっていく

「面白い、受けてたとう。」

双方が間合いを詰める。そして、射程に入った所へ機銃を撃ち合うが、機銃を回避するために左滑りを行っていたため被弾をしなかった。そこで両者は左旋回を始める。だが、坂本の方は航空機と違い急旋回が出来るので後ろへ付くことができた。

「これで訓練終了だ。」

坂本は機銃を連射して零戦に命中させた。この機動力の差はストライカーユニットと戦闘機との違いであり、実際に同じものを使ったどうなるか分からなかった。

- 加賀 - 飛行甲板

模擬戦を終えて、ウィッチーズが次々と着艦していく。

「まさか美緒をあそこまで苦戦させるなんて。」

「ああ、ストライカーユニットじゃなければ多分、負けていただろうな。後で名前を聞いておきたい。」

坂本は赤城の着艦していく零戦隊の方を向きながら言った。

- 赤城 - 飛行甲板

「坂井1飛曹、今日は残念でしたね。」

坂井の傍に整備兵がやって来て言った。だが、坂井はやけに清々しい顔をしていた。

「どうかしましたか？」

「いや、初めて強敵に会えた気がしてな。」

「あの士官服を着たウィッチのことですか？」

「ああ、後で名前を聞きたいものだな。」

その後、赤城から艦上攻撃機と艦上爆撃機が発艦して爆雷撃訓練をして、ドーバーのウィッチーズ基地に帰港した。

交流

・ドーバー海峡・ 501空の基地先端の港 連合艦隊泊地

「先程、ウィッチーズ隊よりパーティの誘いがあった。」

それはミーナ中佐が他の隊員達に言われる前に連合艦隊に伝えたものだった。無論、皆の考えていることだったが。

「何時でしょうか？」

「今日の18時からだそうだ。」

「我々とはかく、パイロット達の方は喜ぶでしょうな。坂井等に言つと間違いなく『行くべきだ』というでしょうな。」

「まあ、ここの所連中も疲れているようだし。少しくらいタメを外させてやるにはいいでしょう。」

連合艦隊首脳等は皆許可を出した。この事をウィッチーズの方にも伝え、昼には連合艦隊に所属するパイロット等にも伝えられた。

「坂井さん、あの士官服の人に名前を聞くんですか？」

「当たり前だよ。一応、撃墜されたからな。」

坂井は笑顔を交えて言う。そこへ岩本が来て

「なんだお前、撃墜されたのか。こりやお前は幽霊かもな。」

岩本も冗談を交えて言う

「はは、俺はまだ足が付いているよ。」

坂井も笑いながら言い返す。

- 501 空基地 - ミーティングルーム

「今日のパーティーには連合艦隊の方々も出席します。いつもより賑やかになると思いますがあまりタメを外しすぎないように。」

ミーナが前に出て隊員達に説明をする。

「ええー、それじゃあ料理の方も気合をいれて作らないと。」

宮藤は袖を捲し上げて言う

（気合いれる気なかったのかよ。）

隊員達は皆がそう思う。

夕刻 17:50

皆が食堂に入り始めていた頃。宮藤とリーネは必死に料理を作っていた。これには炊事班も多少手伝って料理を並べていく。

「ふう、なんとか間に合った。」

「疲れたね芳佳ちゃん。」

「うんリーネちゃん。まさかこんなに疲れるなんて思っていなかったよ。」

そんな訳で宮藤等のがんばりによって、なんとかパーティーに間に合うことが出来た。最後に山本等の連合艦隊首脳部が入ってきた。

「これはすごい。こんなにも豪華にしてくれるとは。」

山本をはじめ参謀等は心底驚いている。

「えー皆さん、それでは今夜のパーティーを楽しんでください。」

ミーナが前で伝えたと皆料理を食べ始めたり、談笑したりしはじめる。そんな中で坂本と坂井はお互いが引かれ合うかのようになっすぐに向かい。

「貴方の名前はなんですか？」

二人はほぼ同時に質問する。

「えっ？」

これまた同じタイミング。

「はっはっは。なんだ貴方も同じ考えなのか。」

坂本は笑いながら言う。

「私は扶桑皇国海軍の坂本美緒。階級は少佐だ。」

階級を聞き、坂井は敬礼をしながら。

「失礼しました。私は大日本帝国海軍航空隊の坂井三郎一等飛行兵曹です。」

「まあ、そう硬くなるな。国籍は違うが同じ海軍だ、階級はいらない。それにここは外人部隊のようなもので階級は技量の表れとさえ思えばいい。」

「あのう、私の機銃掃射をなぜあんなにも綺麗にかわせるんですか？」

「っわ！、何だ？」

エイラは突然話しかけられたので、びつくりした表情で相手を見る。

「いえ、あの模擬戦の時に後ろに付いたのに、振り向かずに機銃をかわしていたので。」

「ああ、あの時のパイロットか。あれは私の固有魔法の未来予知でかわしたんだゾ。」

「未来予知？」

「ほんの少しの未来が読めるんだよ。」

「すごいな。じゃあ、零戦を撃墜できたのもそれのおかげ？」

「零戦？ ああ、あの機体のことが。前にあの機体に触ったことがあつて、そのときに装甲の薄さや補助翼が巨大だったからな。あれでは急降下から急上昇について来れるはずがないからな。」

（まさか初の模擬戦でそれを気づかれるなんて。）

パイロットは心底驚いた表情になる。

「ねえトゥルーデ、この中に好きな男性がいる？」

ハルトマンが笑いながら聞いてきたが、あいかわらず直ぐに本気にしてしまうバルクホルンは赤面して

「っな！。ハルトマン、それはどういう意味だ？」

「言ったとおりの意味だよ。」

そう言いながらハルトマンは逃げる。

「こら、ハルトマン。逃げるな——。」

バルクホルンは必死な形相で追いかける。

（もう、トゥルーデたら。）

ミーナは困った顔で思っていた。

（でも、この後にはガリア解放戦が待っているのだから。）

こうして今日も平和（？）な時を過ごした双方は宿舎に帰り、睡眠を取った。

交流（後書き）

次回からはいよいよ最終決戦が始まっていきます。さて、この戦いは連合艦隊に何を意味するのか？ はたして元の世界に帰ることができるのか？ そして、なぜ連合艦隊がこの世界にきたのか？ 最後まで楽しんで見てください。

最終決戦へ

- 連合艦隊 旗艦 大和 - 作戦会議室

「今日は総司令部で新たな作戦会議がある。そのためしばらく艦隊をあけるので、その間の指揮は山口中将が執って頂きたい。」

「分かりました。まだまだ長官程ではありませんが、指揮を執らせていただきます。」

「崎水君、車の用意をお願いしたい。」

「長官の頼みとあらば何なりと。」

そう言って、崎水栄介特務少尉は車の用意の為に出て行った。

- ウイツチーズ基地 -

「ミーナ中佐、何処へ行くんですか？」

宮藤は廊下を正装で歩いているミーナ中佐を見つけて疑問に思いながら聞く

「今日は総司令部で作戦会議があるの。まだ詳しいことは分からないけど、恐らくガリアの上陸作戦だと思うわ。」

「ガリアへ？」

「ええ、そこを足がかりにヨーロッパ解放を展開するつもりだと思
うわ。」

「わかりました。」

「では、後は宜しくね。」

ミーナは笑顔になって廊下を歩いていく。外では山本と崎水が乗る
軍用車が待っていた。

「今度の作戦は恐らく、そちらにもかなりの損害は出ると思うわよ。」

「ええ、ですが、皆覚悟をしています。軍人というのは死ぬことが
仕事でして。」

「でも、そう簡単に死ねる覚悟がなぜ簡単に出来るの？」

「我々の世界では、中国という国と戦争をしているんです。そして、
その最中にアメリカ、この世界のリベリオンに相当する国にも戦争
を仕掛けようとしていたんです。その国と戦うのは、全員が死ぬ覚
悟で戦わないと勝てない国です。」

「そんな国となぜ戦おうと思ったの？」

「我が国は資源、特に石油が取れない国なんです。そのため、他国
からの輸入に頼っていました。ところが、陸軍が中国を攻撃、それ
と同時にアメリカを含むA B C D（アメリカ、イギリス、中国、オ
ランダ）包囲網をされて、この四力国に開戦を決意しました。」

「では、何故その陸軍を説得しなかったの？」

「出来なかったんです。海軍と陸軍の仲も犬猿の仲でしたから。それに、一度開戦したらそう簡単にやめることが出来ないんです。第一、わが国にアメリカは絶対に呑む事のできないハル・ノートを突きつけてきました。」

「そのハル・ノートは？」

「我が国の中国からの撤退。同盟の破棄などです。その他、あまりにも横暴な内容突きつけられました。それは我が国が明治から築き上げてきた領土、植民地、同盟を全て破棄しろというものでした。それで開戦へと向かっていったのです。」

「その中で貴方達はこの世界に？」

「はい。開戦への会議の為に呉に集結していた所を台風によって。」

「そう。そんな激動の時代を貴方達は歩んできたのね。」

ミーナは悲しそうに外を見ながら言った。山本ももうそれ以上何も言わなかった。

（彼等は私達とは比べ物にならないほど多くの修羅場を越えてきている。私達の多くはまだ死ぬ覚悟の出来ていない。でも、彼等は簡単に死ねると言った。こんな人達を死なせたくない。）

ミーナは心にそう誓った。

- 総司令部 - 作戦会議室

そこには多くの司令官クラスの人間が集まっていた。そこに扉が開き、総司令部の参謀等が入ってきた。

「えーでは、諸君に集まってもらったのは他でもない。我々は明日、ガリアのノルマンデーに大規模上陸作戦を展開する。既に各隊には準備を急がしてもらっている。」

そこに陸軍部隊の司令が

「我々戦車部隊は地上ネウロイの瘴気に阻まれて無力ですが。」

「その心配はいらん。すでに我が国、リベリオン、カールスラントがバッテリー式の瘴気を無効化する装置を開発に成功、既にそれを搭載した戦車が生産、集結している。2時間は瘴気の中でも作戦を行えるし、一度瘴気から出て充電すればまた戦える。」

「そんなものまで開発していたのは驚きだな。」

「この作戦は各軍の戦車や砲兵部隊、陸戦ウィッチに航空ウィッチ、海軍作戦部隊も参加する本格的な上陸作戦です。」

「どのくらいの戦力なんだ？」

「恐らく、誰も見たことが無いほどの大艦隊に向かって上陸するでしょう。砲撃なども凄まじいものになります。」

「各部隊は出撃の準備を急がしてください。それでは解散。」

そう言つて皆が席を立て出て行つた。山本とミーナも外で待つて
いる崎水の軍用車へと向かつた。

「まさかこうも早く反攻作戦が行われるなんて。」

「早い方が良いでしょう。その分早く故郷に帰れる人がいますか
ら。」

「そうだけど。今の戦力で大陸での作戦は大丈夫かしら？」

「大丈夫ですよ。上陸の支援には我々連合艦隊も参加しますから。
敵を撃滅して上陸させますよ。」

「確かに貴方達の中に一際目立つ戦艦が2隻いるけど、大丈夫なの
？」

「大和と武蔵のことですか？あれは確かに砲撃戦では無敵ですから
活躍すると思います。それに我々には優秀な航空部隊もいます。必
ずやお役にたてる戦いをするでしょう。」

「分かつたわ。明日に備えて準備をお願い。」

「分かりました。」

基地に着き、山本は直ぐに大和にて皆に伝えた。

「我々は明日、ガリアへの上陸を支援することになった。各員の奮戦には期待をする。」

「分かりました。ところで長官、先ほどブリタニアの砲口開発部から新種の砲弾を受け取りました。」

「どんなのだ？」

「なんでも目標に命中して0・1秒後に起爆するのと、時限信管式で拡散する榴弾砲だそうです。」

「それでは敵に対してかなりの戦いが出来るな。」

「ええ、それにV-T信管の対空弾なども受け取りました。」

「何、それはすごい。明日の成果を期待しようではないか。」

V-T信管とは発射後、周囲の数メートルにマイクロレーダー波を発して、それに反応があると起爆する対空兵器で、史実、アメリカはマリアナ沖海戦辺りから実戦配備を始めたもので、日本の特攻機を何機も落としている兵器である。

「それでは明日の作戦に備えて早めに睡眠を取らせましょう。」

「ああ、そうしてくれ。」

・ウィッチーズ基地・ ミーティングルーム

「明日、大部隊によるガリア上陸作戦を開始します。私達の任務はこの護衛、及びネウロイの巢の破壊です。」

「いよいよ大陸反攻作戦か。」

「私の故郷は必ず取り返しますわ。」

ペリー又は熱意を燃やしながら張り切っている。

（いよいよはじまるんだ。）

宮藤はそう思いながら拳を握り締める。

「では各自、明日に備えて英気を養っておいてください。」

「了解。」

最終決戦へ（後書き）

PV20000を突破。ユニークも4000を突破しました。それでは感想と評価を宜しく。

最終作戦始動

朝、連合艦隊は出撃の準備に急いでいた。

「長官、予定通り出撃はできますが、参加する艦艇は何にしますか？」

「何を言っている？今日は全艦出撃だ。」

「しかし、それではこの守りは？」

「その必要はない。どの道これは最終決戦だ、全ての戦力で敵を叩く。」

「分かりました。各艦隊の司令官にそう伝えます。」

出撃の準備が整い山本は乗艦の赤城に向かう。本来は大和へ乗艦すべきだが、山本は赤城へ乗って指揮を執ると言ったので参謀等は許可をした。尤も山本に逆らう参謀はいないのだが。

「501空の彼女等はまだかね？」

「もうじき来るかと。・・・あつ、見えました。」

「乗艦次第出撃する。」

ウィッチーズは自分のストライカーを履いて飛んできた。そして、赤城へ着艦する。

「501統合戦闘航空団、ただ今着任しました。」

ミーナは甲板で出迎えてくれた山本へ敬礼する。山本も答礼で返して、

「では出撃します。」

黒煙を吐き、連合艦隊水上艦は隊形を整えて出撃していく。

「全艦へ、第二戦速にて前進、前方の大艦隊へ合流する。」

前方には上陸部隊を乗せた輸送船団と上陸を支援する各国海軍の艦艇がまっすぐと向かっていく。それはまさしく1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦の様な大艦隊であった。しかも、上陸する場所がその時の一つ、オマハ・ビーチである。

「上陸地点が見えてきました。地上ネウロイが多数視認、飛行ネウロイは現時点では視認できず。」

副官が状況を報告したその時、前方を進んでいた重巡那智が地上ネウロイの砲弾を喰らい爆発、炎上した。

「重巡那智が大破、機関停止、総員退艦命令を出しました。」

「全艦へ、砲撃を開始しろ。島風是那智の乗組員の救助。」

「了解。主砲、仰角40°。撃！」

砲撃指揮官の号令で主砲が火を噴く。地上のネウロイも負けじと撃

ち返してくる。

「航空隊は出撃。地上ネウロイを爆撃せよ。」

号令で航空隊は出撃していく、各国海軍も航空隊を上げて援護をさせる。

「主砲は命中。敵を数体なぎ倒したとのこと。」

「よし、直ちに次弾撃ち方用意。」

そんな時、再び爆発が起きた。

「ブリタニア海軍のキングジョージが被弾。現在、傾斜中。」

「そんな、戦艦がそんなにも簡単に沈むものなのか。」

山本は航空派だが、戦艦の頑丈さは分かっている。それを簡単に沈没させられてしまったのだから驚きを隠せない。

「さらに、カールスラント海軍のビスマルクに被弾。こちらは戦闘に支障なし。」

そんな中、航空隊はネウロイの上空に到達していた。

「左5度。少し往きすぎ、右に2度修正。」

パイロットは微妙な数字を狂い無しに修正していく。

「ヨウソロー、ヨウソロー。よい。撃」

機体下部から切り離された爆弾がネウロイに向かって落ちていく。そして、ネウロイの丁度真ん中に直撃して、ネウロイは崩れ去る。

「やったー。あははは。」

爆撃手は命中したあまり嬉しくなったが、次の瞬間には機体が大きく揺れる。

「左翼に被弾。これ以上は飛べません。」

パイロットからの報告を聞き、爆撃手は外を見た。そこには一際対空機銃を撃つネウロイを見る。

「通信手、母艦に打電しろ。『我攻撃に成功するも、被弾す。我これより敵に体当たり。名誉の戦死を遂げる。』」

通信手と操縦手は覚悟を決めたのか、何も言わずに打電をした。そして、爆撃手の指差したネウロイに向かって機体を旋回させる。

「短い間だったが、どうもありがとう。」

爆撃手の最後の言葉を区切りに、機体はネウロイに体当たり。これを沈黙させた。この様子を見ていた他の機体の搭乗員は燃えさかる機体に向かって敬礼をした。

「俺も必ず逝くからな。お前等だけを逝かせやしない。」

その後も被弾、帰還が不可能な機体は次々と体当たりを行う。

「長官、未帰還機は48機です。」

「随分と落とされたな。この半分は敵に体当たりを？」

「はい。皆若くて勇敢なパイロット達でした。」

「そうか、彼等の死を無駄にはいけない。なんとしても上陸作戦を成功させるのだ。でなければ死んで逝った者達へ申し訳ない。」

各艦隊の司令官もこの報告を聞き、涙を吞んで突撃命令を下した。だが、ネウロイの方もそう簡単に上陸を許してくれず、複数の艦艇に被害が及ぼされていた。そんな時連合艦隊の戦艦武蔵に直撃弾が喰らうのであった。

発艦

武蔵の後部甲板をネウロイの砲弾が直撃した。

「被害状況をしらせよ。」

「はっ、後部甲板に命中。格納庫の水偵全機破壊、後部機銃を使用不能。推進器も2基が停止しました。」

「浸水の方は？」

「今のところはありますが、推進器が2基壊れたので速力は半分以上に低下しました。」

その時、武蔵の右舷甲板にまたしても砲弾が直撃した。

「今の損害は？」

「右舷に命中。右舷副砲、第2高角砲が使用不能。機銃も一部が破壊され、浸水も発生。復旧は絶望的です。」

「注排水システムは作動しないのか？」

「ポンプ室がやられていて作動させられません。」

「分かった。総員に左舷から退艦するように伝える。それから赤城へと打電。『我、敵からの直撃弾を受け、浸水が発生。復旧見込めず、総員退艦の命令を発令した。』と。」

そう言つて武蔵の艦長である有馬^{ありま} 馨大佐^{かある}は艦橋を出て行つた。通信兵も打電の為に出て行く。残された艦橋指揮官も順次、退艦の為艦橋を後にする。

「長官。武蔵が直撃弾の影響で総員退艦を指示されました。」

「分かつた。それよりも宇垣君、そろそろブリタニアから貰つた砲弾が役に立つときがきたのではないかね？」

「時限信管式の事ですか？ あれは一応対空兵器ですよ。」

「だが、地上攻撃にも使える。考えてみたまえ、あれが空から降ってくる光景を。」

「確かに仰るとおりです。」

「通信兵。大和に打電せよ『時限信管式砲弾の使用を要請す』と」

「了解しました。」

「艦長、赤城から打電が着ました。例の砲弾の使用を要請しています。」

「分かつた。砲雷長、時限信管式砲弾の準備をさせろ。」

砲雷長は急いで伝声管のところ行き

「砲塔、弾種変更。時限信管式に変える。」

「砲撃指揮所、敵との距離を伝える。」

「はっ、距離約1600m。信管は約2秒にセット」

「聞いたか？ 一発で打ちかましてやれ。」

「準備良し。撃——。」

その瞬間、凄まじい砲音と共にネウロイに向かって砲弾が飛翔する。そして、丁度ネウロイの真上に来たところで爆発、火柱が上った。

「命中。敵を撃滅しました。」

「上陸部隊に上陸させるように伝える。」

知らせを聞いた上陸部隊指揮官は輸送船団とそれを護衛する護衛艦隊を率いて前進する。

「ウィッチーズも発艦させろ。恐らく航空ネウロイがそろそろ来る頃だろう。」

山本の命令を受けて、航空参謀は急いで格納庫へ向かった。

「501空は出撃準備をお願いします。」

「分かったわ。全機飛行甲板へ」

ミーナの指示で全員がエレベーターへ向かった。全員乗ったのを確認して、整備兵はエレベーターを上げた。

「全機発艦準備完了。順次発艦を。」

ミーナの指示でウィッチ等は次々と発艦していく。最後のミーナが発艦し終えたところへ、岩本や坂井が艦橋に入ってきた。

「我々も行かせてください。彼女等だけ戦果を上げられては男として面目が立ちません。」

「いいだろう。どうせ来ると思っていたし、止めても行くんだろう。」

「ありがとうございます、山本長官。」

そう言つて二人は格納庫へと走っていき、部下らにこのことを伝えて発艦を急がした。

準備が出来て飛行甲板に零戦が並ぶ、赤城だけでなく他の空母からも出撃要請を受けて零戦が並んでいた。

「岩本さんも行かれるんですね。」

整備兵は岩本の元に来て尋ねた

「ああ、彼女等ばかりに戦果を上げられては男としての面目が立たないからな。」

「本当の所は違う理由なんでしょう?」

「お前には敵わんな。確かに違う理由がある。どうやら、俺はこの世界を守りたいらしいな。」

「貴方らしいですね。でも、生きて帰ってきてくださいよ。」

「もちろんだよ。」

それを聞き、整備兵は敬礼をして岩本の乗機から離れた。

「よし、発艦始め!。」

整備兵の帽が振られる中、岩本機は母艦を離れて上昇していく。その後も次々と発艦していき、最後の坂井機まで帽振りは続いた。そ

空戦

空は戦闘が起こっているとは思えないほど青く澄んでいた。

「全機、散開して敵の接近に備えて。」

ミーナの指示で全員が散開する。下のほうでは輸送船と戦車揚陸艦がノルマンディーの海岸に乗り上げて陸戦ウィッチと機甲師団が上陸をした。上陸部隊はネウロイの巣がある、レンヌ目指して進軍を開始した。

「敵出現。艦隊前方から敵航空ネウロイ出現。」

坂本の報告でウィッチ等は一斉に向かった。

「岩本さん、どうでしょうか。」

「我々も行くよ。でないと、出撃した意味が無い。」

そう言つて岩本機が旋回して、僚機もそれに従う。

「敵は小型航空兵器。ラロスと思われる。後ろには爆撃兵器を従えて接近してきている。」

「艦隊にも知らせて。」

ミーナの指示が零戦隊の無線機に入り、艦隊に伝えた。

「長官、敵が来ました。艦隊の前方です。」

「全艦、対空戦闘用意。戦艦部隊に主砲を発射させる。」

山本の指示が上陸作戦参加した全ての艦に届き、対空戦闘の用意に入った。

「主砲、一斉掃射用意、目標、敵ネウロイ。撃——。」

全ての戦艦から対空弾が放たれた。

「ミーナ隊長、後ろから何かが来ます。」

宮藤の報告に全員が後ろを向く。黄色い砲弾が飛翔してくるのが見えて。

「全機、回避して。」

後ろを飛行していたリーネは間一髪で避けて、他も全員が回避した。そのまま砲弾がネウロイの所へ行き、炸裂した。

「すつごーい。」

宮藤が歓声を上げるのも無理が無い。なぜなら、大量の航空ネウロイが一瞬にして半分以下にまで減らしたのだから。

「全機、残存ネウロイの殲滅を開始。」

まず最初に飛び込んだのが、意外にも零戦隊だった。

「一気に敵に突入して機銃を連射、その後は急降下速度を利用して上昇しろ。」

零戦の制限急降下速度を無視できるのは、ブリタニアにて機体の装甲を性能に支障がでない程度に改造したからである。加えて、岩本の得意な一撃離脱戦法

「ネウロイの戦闘機部隊は焦っていますね。」

「当たり前だ、いきなり半分に減らされるなんて思っているわけが無い。」

零戦の機銃が火を吹き、混乱するネウロイに追い討ちをかけた。だが、幾つかのネウロイは零戦の後ろにつき、機銃を放っている。

「どっ、どうしましょう。ミーナ隊長。」

「ネウロイを落として、彼等を助けましょう。」

それを聞き、ウィッチ等は零戦の後ろへついているネウロイに迫った。

「後ろをがら空きにするとは、敵ながら哀れな奴だ。」

坂本はそう言って、機銃の引き金を絞り、命中させた。ネウロイは翼がもげて落下していく

「すまない、助かった。」

助けた零戦は坂本の横につき、風防を開けてパイロットがお礼を言

う。

「残るは爆撃兵器のみ。」

ネウロイの戦闘機は全て撃墜して、残るは未だに進撃を続ける14機の爆撃機だけになった。

「1人1機ずつ落とせばいいだろう。」

そう言つて、バルクホルンは一番前を飛ぶ爆撃機に突っ込んでいった。

「仕方が無いな、大方間違つてもいないし。」

そう言つて坂本も突っ込んでいく。他のウィッチと零戦も続いた。

「祖国を爆撃したネウロイだ容赦など無用。」

両腕のMG42を撃ちまくった。爆撃機の中央上部に何発も命中して、積んでいる爆弾が剥き出しになった。その後も機銃を撃ち続け、爆弾に引火し、大爆発を起こして落ちていった。

シャーリーは機体下部の爆弾倉に集中して撃ち続けている

「くそ、硬いなこいつは。」

そこでシャーリーはネウロイに接近して、持ってきた爆薬を仕掛けた。

「くらいな。」

仕掛けた爆薬に向かって機銃を放った。こちら也大爆発をして落ちていく。

「全機撃墜成功。」

艦隊には一機も到達できずに海へ落下した。

「岩本さん、坂井機が何処にもいません。」

「なんだと!？」

無線を聞いたウィッチも周囲を探した。そして、海面ギリギリを煙を吐きながら飛行する零戦を見つけた。

「坂井!。」

坂本は見つけるなり急いで坂井機に向かった。それをウィッチ等が後に続き、その後ろには零戦隊が続いた。

「坂井、しっかりしろ。」

坂本は坂井機の横につき、風防を開けようとするが、途中で引つかりあげることが出来ない。機銃を撃って割ろうにも史実と違い、厚い防弾ガラスのため、20mmクラスでなければ割ることができない。

「坂本少佐、離れてください。この機はもう持ちません。」

坂井の声が無線に入るが、坂本は無視して機体の下部に入って支え

ようとした。宮藤とバルクホルンも機体を支えようとして下部に入った。

「赤城へ、坂井機が被弾。現在、ウィッチ3名に支えられて帰還中。」

岩本が赤城に知らせてから、坂井機の横につき

「坂井、もう少しだからがんばれ。」

岩本の言葉に涙を流しながら答えた。赤城が見えてきて、一同は安心をする。だが、

「車輪が出せない。」

坂井機は被弾で車輪を出すことが出来なかった。バルクホルンは無理やり車輪を下ろそうとするが、固まっついていて下ろせない。

「先に岩本さん等が降りてください。」

「分かった。死ぬなよ。」

指示通りに坂井機を除く全ての零戦が着艦した。そして、坂井機は甲板少し前で

「もう離れていいぞ。支えてくれてありがとう。」

ウィッチ等は離れて、坂井機は着艦体勢に入った。正確には胴体着艦なのだが。

坂井は着艦寸前にエンジンを止めた。これは、もし着艦に失敗しても燃料が漏れにくくて甲板、機体が炎上するのを防ぐためである。

坂井機は甲板に着地するなり、機体を甲板に擦り付けて速度を落とした。そして、飛行甲板ギリギリで静止した。風防を5人で無理やり引き剥がして坂井三郎を救出した。

「よく着艦の時に風防を開けずにできたな。」

普通、着陸や着艦の時には風防を開けて、パイロットが下を確認しながら着地するのが基本である。

「まぐれかな。」

坂井は惚けてみせた。

「まっ、生きてて良かった。」

パイロットは笑いあいながら待機所へと向かった。その後、ウィッチ等も無事に着艦してきて、坂本、宮藤、バルクホルンは坂井の様子を見ようと待機所へと向かった。

まさかの番外編（前書き）

まさか最終決戦の最中なのに番外編です。

まさかの番外編

朝、ミーナ中佐は廊下を歩いていた。

「全く、美緒ったら。朝に執務室に来るようになって言うておいたのに。」

ミーナは少し怒りながら訓練しているであろう坂本の許へ急いだ。だが、突然後ろから気配がして

「誰？」

ミーナは振り向いて、問いかけた。すると、廊下の奥に1人の少女が立っていた。

「貴方は誰？この基地の人間じゃあないわね？」

だが、少女は一切答えずに下を向いていた。

「ちょっと貴方。一体誰なの？」

ミーナはその少女の近くに行つて聞くが、一切返事が無い。

「ちょっと貴方。ふざけているの？」

ミーナは頭をつかもつと手を出したら

「ぐわおおお。」

突然少女は顔を上げて叫び声をあげた。しかも、その顔は頭辺りから血を流したおぞましい姿だった。

「きゃああああ。」

ミーナは突然の少女の行動とその頭を見て、悲鳴をあげながら倒れ、気絶した。

その悲鳴を聞き、隊員は急いで駆けつけてきた。

「ミーナ。大丈夫か？」

真つ先に坂本が駆けつけてきて、ミーナの体を揺するが返事が無かった。

「坂本さん、ミーナ中佐に何かあったんですか？」

次に宮藤、続いてペリーヌ、リーネと続き、最後にハルトマンが来た。

「ミーナ。おい、大丈夫か？」

「とつ、とにかく医務室に。」

宮藤の提案で、バルクホルンがミーナを抱えて医務室に向かった。

しばらくしてミーナが目を覚ました。

「とつ、とつは？」

「医務室だ。ミーナ、一体何があった？」

「そつ、そうよ。この基地に小さな少女がいなかった？」

「いや、そんな少女はいなかったけど。何故？」

「その少女が突然叫び声をあげて。それから覚えていないの。」

「うーむ。これは少し調べてみる必要があるそうだな。」

坂本の提案にただ1人だけ動揺をしていた。（ネタバレになるから名前はまだ載せないが。）

隊員が聞き込みの為に医務室を出て行き、宮藤は整備兵の人達に聞こうとハンガーに向かった。

「ミーナ中佐は大丈夫だろうか？少女の妖怪？」

宮藤はそんな風に考えながら廊下を歩いていると

「ん？」

宮藤は廊下の隅にある糸を見つけた

「なんだろう。糸？」

糸を拾い上げ、ポケットにしまうと、突然少女の声がした。

「それを返して。それを返して。」

「誰ですか？」

突然先ほどの少女が目の前に下りてきて

「それを返して。」

「きゃああああ。」

ミーナと同じく気絶した。

気づくと、ミーナと同じく医務室に居た。

「あれ、皆は。」

「皆はまた聞き込みに行つたわ。」

「そつ、そうですか。」

「貴方も会つたの？」

「はい、突然目の前に現れて。『それを返して』って」

「それって？」

「この糸です。」

宮藤はポケットから先ほど拾った糸をミーナ中佐に渡した。

「これって、タコ糸。でもなんであそこに？」

「わかりません。」

暫くして隊員が集まり始めた。

「芳佳ちゃん。大丈夫？」

「うん。ありがとうリーネちゃん。」

「美緒、どうだった？」

「だめだ。誰一人として見た者はいない。」

「そう。」

つと、突然医務室の扉が開いて。

「ルッキーニ少尉。これはどういうことだ？」

バルクホルンが持っていた人間より少し小さめの人形を医務室の床に投げた。

「ひつ。」

それはミーナ中佐、宮藤軍曹を気絶させた人形だった。

「ル、ルッキーニちゃん。」

「ルッキーニ。」 「ルッキーニさん。」

「ひつ。」

もはや言い逃れできなかった。

「ひにゃあああ。」

ルツキーニは慌てて医務室の扉に向かったが、既にバルクホルンに固められていた。ルツキーニは向きを変えて、医務室の窓の所に向かうが、こっちはエイラに固められていた。

「ごめんなさい。」

壁際に追い詰められてルツキーニは半べそ状態で謝る。

「ルツキーニさん。」

「ひつ。」

ミーナ中佐がベットから降りて、ルツキーニの許にゆっくりと歩く。その顔は笑っているが言葉は笑っていないかった。

「罰として、半年トイレ掃除。」

「ひにゃああああ。」

ちなみに、この後から高さ15cm以上の人形を持ち込み禁止になったのは言つまでもない。

まさかの番外編（後書き）

大晦日というわけでまさかの番外編を書いてみました。ぜんぜん新年に繋がらないような気もするけど。とりあえず皆さん、よいお年を。

巢へ

宮藤、坂本、バルクホルンの三人は坂井等のいる出撃待機所へと向かった。

「坂井さんは大丈夫なんでしょうか？」

「まあ、心配ないだろう。」

出撃待機所の扉の前に来て坂本はノックをすると、中から『どうぞ』という声がして中に入った。

「坂井、大丈夫か？」

「坂本少佐か、心配はない。あの時はすまなかった。」

「気にするな。」

「あのー、坂井さん。怪我とかしていませんか？しているなら治療しますけど。」

「すまない、腕を負傷していてな。頼めるか？」

「はい。」

宮藤は坂井の左腕の傷を治療し始めた。」

「それで、そちらの人は？」

「ああ、まだ自己紹介をしていなかったな。」

坂本がそう言うと、バルクホルンはカールスラント式の敬礼をして

「私はカールスラント空軍第JG52第2航空隊のゲルトルート・バルクホルン。今は501空の副官を務めている。」

「副官って、坂本少佐が務めているんじゃないんですか？」

「私は雑務とかは無理だからな。実質、戦闘指揮を執るくらいだ。」

しばらく坂井と会話をしていた

「終わりましたよ。」

宮藤が坂井の治療を終える。

「すみません。」

「では、また後で。」

そう言って三人は自分達の部屋に戻り、巢への攻撃準備を始める。

その頃、ブリタニア空軍省の地下研究所

「司令、もうすぐ我々のネウロイ研究で製造を始めたウォーロック0号機が完成します。ただ、技術者の話では今度の作戦への投入は早すぎるとの事です。」

「ふん、我々の勢力拡大にはどうしても必要なのだ。戦争終結後の世界の利権の為にもな。」

「分かりました。出力安定次第、ウォーロックを出撃させます。」

「しかし、我々の最初の実験で思わぬ連中を呼び寄せてしまったようだな。」

「あの艦隊の事ですか？彼等の介入は全くの予想外でした。」

「全く、ネウロイを異空間に閉じ込める実験の失敗が無ければこんなことにはならなかった。」

なにやら不穏な動きのある上層部の会話をウィッチーズ等、そして連合艦隊の人間が知るよしも無かった。

「第一次攻撃隊、発艦準備急げ！」

各国の空母の飛行甲板は第一次攻撃隊の参加機に爆装をしている。戦闘機にも25kgもしくは50kgの爆弾を二つ取り付けての攻撃である。

「長官、ブリタニアの飛行場からの爆撃は成功しています。既にガリアの殆どの建物は跡形もなく消しました。」

「ふむ、ガリアの復興はかなり掛かるだろうが、仕方が無い。」

爆撃の目的は鉄骨でできた建物を壊してネウロイの再生をさせない

ためである。

「各空母から攻撃隊を発艦始めました。我々も出撃命令を。」

「よし、風に立て。攻撃隊、発艦せよ。」

空母はいったん風に立てば安定する。したがってどんな嵐の中でもすぐに飛び立つことができる。

「出撃命令を受けた。これより発艦する。」

最初に零戦が発艦を始める。零戦はなめらかに上昇をして高度をとり、艦隊の周囲を警戒する。

「淵田機、出撃する。」

第一次攻撃隊指揮官、淵田^{ふちだ} 美津夫^{みつお}中佐の乗機が発艦を終えて、次にウィッチ等が出撃をする。

淵田中佐は史実において真珠湾攻撃の総指揮官で第一次攻撃隊を指揮し、その後は南方作戦やインド洋作戦にも参加した人物である。

第一次攻撃隊の任務は巢の下に占領された都市へと侵攻する陸上部隊の航空支援、及び防空任務である。ただし、ウィッチーズは巢への直接攻撃が任務である。

「此方は淵田機、母艦へ発信、『我順調に飛行中。今のところ敵影なし。』」

しばらく飛行をして戦闘地域の上空に到達した。

「こちらハーミーズ攻撃隊。これより急降下、敵への爆撃を行う。」
淵田だ後ろ振り返ると、ハーミーズから発艦したソードフィッシュが急降下にはいった。

ソードフィッシュは第二次大戦において活躍したイギリスの雷撃機で複葉機時代の最後を飾った非全金属製の機体であり、アベンジャーと同じく雷撃機の中では急降下爆撃ができる貴重な機体で評価も高い航空機である。

急降下にはいったソードフィッシュはネウロイの対空砲火を掻い潜って接近する。そして搭載している250?爆弾を2つ投下する。
地上に火柱が上り、ネウロイは崩れ去った。

「攻撃成功。我々は母艦に戻る。」

先ほど爆弾を投下したソードフィッシュは反転をして母艦へと針路をとった。地上では砲弾の炸裂音が響きそれが止むことの無い空を航空隊が通過していくと

「こちら、カールスラント陸軍第18戦車大隊第6戦車連隊。現在、ネウロイと交戦中。航空支援を要請する。場所は今から信号弾を上げる。」

無線から入ってきた声を聞き、各パイロットは辺りを見回す。すると、西の空に発光が起こった。

「赤城攻撃隊。直ちに目標へと向かいます。」

淵田の指示で赤城攻撃隊は針路を西にとって向かう。

「目標視認、ネウロイ3体。いずれも戦車型。」

「了解。各機へ、爆撃針路維持。爆撃用意」

「用意よし。投下」

機体下部から1t爆弾を投下し、爆発音と共にネウロイは沈黙する。

「支援に感謝する。これより進撃を続行。」

下の戦車連隊は再び進撃を開始する。

その頃、ウィッチーズは巢の近くまで接近に成功していた。

陰謀始動（前書き）

前回にもマロニー大将の不穏な動きがありましたが、今回はそれが始動します。

陰謀始動

「もうすぐ巢の真下よ。全機警戒態勢。」

ミーナの指示で全機が散開して警戒態勢に入るが、程なくして巢からネウロイが出現する。

「バルクホルンとハルトマンは先制攻撃。シャーリーとルツキーニが続いて攻撃。最後に私と宮藤が攻撃する。リーネとペリー又は後方にて援護。」

「了解。」

坂本の指示を受けてカールスラントのダブルエースが先陣を切ってネウロイに突入する。ハルトマンが左、バルクホルンが右に分かれて攻撃を行い、続くシャーリーとルツキーニが上下を攻撃する。ネウロイは苦しそうで、理解できない声を出す。

「コアが見えた、これより攻撃する。付いて来いよ宮藤。」

「はい。」

坂本は愛刀を抜刀してネウロイに構える。その刀は白いオーラを発していて坂本の入念な手入れを物語っていた。

「やああああ。」

坂本はストライカーの速度と刀を振るスピードに任せてネウロイを一刀両断する。中央にあったネウロイのコアは体共々破壊されて、

破片となって地上に降り注ぐ。

「ネウロイ破壊確認。」

サーニヤが短くそう言ったのを確認してウィッチーズは飛行を続けた。

「巢に到着。皆、警戒して。」

常に渦を巻いている黒い雲（巢）の外側に到着したウィッチーズは雲の中心を目指してさらに飛行する。

そんな時、空軍省地下研究所。

「司令。ついにウォーロック0号機が完成しました。」

「直ちに攻撃させる。」

「了解。」

まだ早すぎる攻撃はこの後の悲劇を起こすことになるとはまだ誰も考えていなかった。

格納庫の扉が開き、中から戦闘機みたいな機械が出現する。しかもこの時代の最新技術であるジェットエンジンを後部に4つ備えられていて、音速近くまで速度を上げることができる。

「出撃準備よし。」

「ウォーロック0号機、発進。」

ジェットエンジンが轟音響かせて空へと機体を上げる。そして、最高速度でガリアの巢へと向かった。

「！。前方に敵が出現。あれは？」

目の前に出現したネウロイは人間に似た姿のネウロイだった。

「どういう事？ 人型ネウロイ？」

「ミーナ。これはどういう事だ？」

「分からないわ。少なくとも、私達は今まであんなタイプのネウロイは見た事が無いわ。」

だが、その人型ネウロイは攻撃する様子は無く。逆にウィッチーズの方に近づいてきた。バルクホルンは機関銃を構えるが

「待つて。」

「ミーナ？」

ミーナに制止させられた。人型ネウロイはなおも近づいてくる。そして、ウィッチーズの前で停止すると、あるうにか自分達の弱点であるコアを露出させた。

「どういう事だ？ネウロイが自分から弱点を出すなんて。」

隊の全員は困惑に襲われる。だが、その疑問は直ぐに消えた。突如、ブリタニア方面から急速接近する飛行物体を捉えたからだ。

「全員。この場から離れて。」

ミーナの指示に従い。隊員は人型ネウロイから、巣から離れた。それと同時に急速接近中の飛行物体が視認できた。

「なにあれ？」

視認できた飛行物体は突如、人型ネウロイに向けて機首に備え付けられている4門の30mm機関砲を連射する。人型ネウロイはこれに耐え切れずに消滅した。

その頃、ブリタニアの司令部では

「ウォーロック、ネウロイを1機撃墜。」

「見たか。既に我々の研究はネウロイを超えたのだ。」

マロニーは得意げに言うが、皆自分の仕事をしている為に誰一人として聞いていない。

「司令。複数のネウロイ反応あり。」

「各個に撃破しろ。」

501空もネウロイの大量出現を目にしている

「ネウロイの数が。」

「この数って」

大量のネウロイが出現している事にも驚いているが

「あの機体はなんて攻撃力なんだ。あれだけのネウロイに立ち向かっていて。」

大量のネウロイ相手に謎の機体は次々とネウロイを30mm機関砲で撃墜する。すると、変形をしてビームを撃ち出す。

「！。なぜあれがビームを？」

現代でもビームを完成させようという動きはあるが、物理的破壊を行える光線を高密度で撃ち出し、それを維持できる実験を今だ成功させていない。そもそも不可能ではないかという考えもある。

ビームはネウロイをいとも容易く貫通して破片に変える。だが、ネウロイはその時には数え切れない数にまで膨れ上がっていた。

司令部では

「これ以上の戦闘は危険です。直ぐに撤退命令を。」

「ならん。ブリタニアの勢力拡大のためには我々でガリアを解放せねばならん。」

「しっ、しかし、既に此方の処理能力を遥かに超えるネウロイが出現しています。」

「何の為のコア・コントロールシステムだ。直ぐに起動させる。」

「無理です。共鳴させるコアを持ったウォーロックが5体以上必要なんですから。」

だが、突然コア・コントロールシステム起動のブザーが鳴り響く。

「どうした？」

「ウォーロックが自衛の為にシステムを起動させました。」

「なんだか様子がおかしい。」

坂本がそう言った時、ウォーロックの周囲を旋回していたネウロイが突然、同士撃ちをはじめた。

「味方を撃っている。」

「ウォーロック。ネウロイを殲滅しました。」

司令室に歓声が沸きあがる。だが、突如ウォーロックのコントロールが停止した。

「どうした？」

「分かりません。突然コントロールを消失。」

その時、ウォーロックは機体が黒く変わり始めていた。

ウォーロックの攻撃

「なっ、黒く変わっていく?」

「坂本さん、これは一体?」

突然ネウロイを殲滅した謎の機体が黒く変色し始めた。

「分からない。全員警戒しろ。」

「了解。」

変色し終えたウォーロックはセンサーの目を赤く変えてウィッチにビームを放った。

「うわー。」

辛うじて回避に成功したウィッチは

「散開。攻撃態勢。」

ミーナの指示で散開してウォーロックに攻撃を仕掛けようとする。だが、ウォーロックは変形してウィッチから離れていく。

「どういう事?」

「分からない。だが、その方角は!」

「はっ、上陸支援艦隊の方角。」

ウィッチは気づいてウォーロックを追っていく

「急げ。艦隊がやられたら制空権を失う。」

司令部

「くそ、早く復旧しろ。」

「無理です。システムがダウンしていて復旧など不可能です。」

「司令。ここは自爆させるべきです。」

「ならん。あれを失ったら我々は世界の利権確保はできなくなる。」

「しかし、既に味方を攻撃しているんですよ。」

「司令、憲兵隊が押し寄せています。」

「なんだと。何故ここが分かった？」

「研究員の一人が知らせていたようです。」

「くそ、そいつはクビにしてしまえ。」

「長官、正体不明の飛行物体が接近中。距離は3700。」

「第二次攻撃隊は発艦中止。爆撃機を格納庫に入れて、戦闘機はそのまま発艦させる。格納庫の戦闘機も発艦準備させて発艦させる。」

山本の指示を受けて第二次攻撃隊の戦闘機は発艦を始めて、爆撃機は格納庫に下げる、格納庫の戦闘機も銃弾を装備して出撃準備を始めた。

「戦闘機隊は飛行物体の迎撃を行います。」

零戦は編隊を組んで正体不明の飛行物体に向かう。

「目標視認。速い!。」

零戦のパイロットはウォーロックの飛行速度を見て驚く。

「攻撃用意。散開して攻撃しろ。」

零戦は編隊を解いて散開、ウォーロックの周囲から攻撃しようとする。

「撃ち方はじめ。」

零戦の20mmが連射されて、ウォーロックの表面に穴をあけていく。だが、その穴はすぐに再生されて無くなる。

「なっ!。どういう事だ?」

パイロットは疑問に思ったが、

「うわ、」

乗機の左翼にビームが命中してバランスを失い、きりもみ状態になって落ちていく

「畜生、」

パイロットは風防を開けて脱出に成功するが、他の機体が燃えながら落ちていくのを見て悔しがる。

「俺達じゃ敵わないのか？」

そう思った時、ウォーロックに遠くから放たれた一発の銃弾が命中する。その衝撃でウォーロックはバランスを失い、急降下していった。

「やったあ。」

リーネの対戦車ライフルから放たれた銃弾は見事ウォーロックに命中させることができた。ウォーロックは海面に今だ浮かぶ武蔵の艦首に激突して武蔵共々海中に沈んでいく。

「長官、武蔵が完全に水没しました。」

「分かった。」

山本はただ短くそう言うと、武蔵の浮かんでいた方を見る。

「謎のネウロイは完全に水没。消滅は確認できないが恐らく」

「そうでもないぞ。」

バルクホルンの言葉をあつさりとエイラは否定する。

「これを。」

エイラは自分の持っているタロットカードを隊員に見せる。そのカードは『塔』

「最悪だよ。」

エイラは武蔵の沈没地点を見る。すると、突然海面から水柱が上がった。

「な、何だ、あれは！」

海面から突然赤と黒に染まった武蔵が出現した。

ウォーロックの攻撃（後書き）

アニメでは武蔵ではなく赤城だったのですがオリジナルということで武蔵にしました。私的には大和でも良かったんですけど、アニメの2期でネウロイ化してしまったのでやめました。

武蔵 ネウロイ化

突然海面から沈んだはずの武蔵が出現した。

「長官、これは一体？」

「なぜだ？なぜ沈んだ船がひとりでに浮上できる？」

だが、武蔵は浮上だけではすまなかった。突然、海面から離れて空を飛び始めた。

「ばっ、馬鹿な。戦艦が空を飛ぶなんて。」

某漫画や小説でもないのに突然武蔵が空を飛んでいくのにこの場に居た全兵士が唖然としていた。だが、そんな気持ちも武蔵から放たれた砲弾をみて我に返る。

「面舵一杯。全速力で回避。」

駆逐艦秋風は回避しようとするも、すでに間に合わなかった。秋風の左舷に命中、魚雷に誘爆して一瞬で沈んだ。

「駆逐艦秋風沈没。生存者なし。武蔵からの発砲です。」

「全艦。戦闘準備。目標は武蔵。」

「長官、それでは我々は」

「あれを破壊しなければ大勢の人間が死ぬ。」

この命令は全戦闘艦に通達される。

「了解。主砲発射用意。」

艦長の指示で主砲を全て空に上昇していく武蔵に向けられる。

「発射ー！」

全ての砲を持つ艦艇から放たれた主砲は無数にあり、その中の何発かは狙い通り武蔵に命中する。だが、今度は武蔵がビームで反撃してきた。

「テイルピッツに直撃。轟沈です。」

ビスマルク級2番艦はあっけなく沈んでいった。全乗組員と共に短い生涯に幕を閉じた。

「ウィッチより、攻撃を中止。と言っても、我々の主砲ではもう届きません。」

武蔵は雲の上にまで来ていて、主砲ではもはや攻撃できる位置ではなかった。

「全機、戦艦武蔵は先ほどの飛行物体が制御しています。艦首に先ほどの飛行物体を確認。」

「コアは武蔵の機関部だ。見たところ装甲は異常なほど厚い。外部からの破壊は不可能だ。」

「だったら、我々の中の数人が内部に入って破壊すればいい。」

バルクホルンは編隊から離れて一人で武蔵を攻撃し始める。

「しょうがないわね。それで、誰が突入する？」

「私が行こう。」

真っ先に坂本少佐が志願する。

「待ってください。私が行きます。」

宮藤は坂本の志願を取りやめて志願する。

「一人ではだめよ。」

「だったら私も行きます。」

「私も行きますわ。」

続いてリーネとペリーヌが志願する。

「なるほど、ペリーヌと一緒に心強い。これで行けるか？」

「ええ。では、他の皆はこの3人の突入を援護して。」

「了解。」

3人の突入を援護すべく隊員は武蔵の注意を逸らすべく攻撃を開始する。

「遅れをとるなよ。ハルトマン。」

そう言つてバルクホルンは振り返るが、そこにハルトマンはいなかった。

「先に行くよ。 シュトルム」

ハルトマンの周りに風が現れて武蔵の左舷を破壊する。

「あ、こら。私の仕事を。」

バルクホルンも負けじと武蔵に接近して攻撃をする。

「エイラさん、サーニヤさん。武蔵の対空機銃を潰してくれないかしら。」

「了解。」

無数にある対空機銃に向かってサーニヤのロケット弾が放たれる。右舷の機銃は殆どを破壊されて弾幕が弱まる。

「チャンスだ。ルツキーニ、行くぞ。」

シャーリーとルツキーニは武蔵の右側から接近する。その際に艦首に付いているウォーロックがビームで応戦するが、難なくこれを回避して

「行つけ。ルツキーニ」

シャーリーはウォーロックに向かってルツキー二を投げる。多重シールドを張って、ルツキー二はウォーロック共々艦首を破壊する。

「芳佳、後は頼んだよ。」

ルツキー二はそう言って武蔵から離れていく。

「行きますわよ。2人とも準備はよろしくて？」

「はい。」

3人はルツキー二の開けた艦首から内部に侵入した。

「ここからは内部を飛ぶから、2人とも付いてくるのよ」

3人は武蔵の内部を機関部目指して飛行する。だが、

「きゃあ。」

武蔵の内部にもビームが放たれて宮藤とリーナは装備を破壊されるが、3人はこれを無視してさらに飛行を続けた。

「隔壁が。」

機関部に繋がる隔壁は閉ざされている。ペリー又は機銃を構えて発砲するが

「この銃ではダメね。」

さすがに機銃では隔壁を破壊することはできなかった。

「そんな。」

「ここまで来て。」

ペリー又は機銃を捨てて隔壁に行き

「トネル。」

眩い光がペリー又から発せられて隔壁は開いた。正確には焼き切った。内部には赤いネウロイのコアが光っていた。

「どうやって壊すの？」

ペリー又の銃は弾切れ、2人は銃を破壊された。

「2人とも。私を支えて。」

宮藤は2人に支えられて、ストライカーをコアに向ける。ストライカーの回転を逆にしてコアに向かって行った。

「なっ、ストライカーが」

ストライカーはコアに当たり、赤い光と共に消滅した。武蔵も光る破片に変わり、海面に降り注いだ。

「勝った!。」

「勝ちましたわね!。」

「ああ。勝ったな。」

隊員達は歓声を上げる。そしてミーナは

「今連絡があつたわ。ガリア地方上空のネウロイの巢は消滅を確認されました。」

「そういえばミーナ。あの飛行物体は何だったんだ？」

「あれはマロニー大將が極秘に作っていたネウロイ殲滅兵器、通称ウォーロック。たった今ブリタニアの首相からマロニー大將は、配下の研究員、兵士と共に逮捕されたと連絡してきたわ。」

「それは一件落着だな。」

「それでは、ストライクウィッチーズ。全機帰還します。」

「了解。」

1944年9月

ガリア地方のネウロイは完全消滅を確認された。

これにより、第501統合戦闘航空団は解散された。

武蔵 ネウロイ化（後書き）

次回はいよいよ最終回です。この小説を読んでいたいただいた皆様へ、最後もしっかりと見ていただきたいと思います。遅くとも金曜日には更新させていただきます。

帰還、そして（前書き）

最終話です。

帰還、そして

連合艦隊は501基地の港に生き残った全ての艦艇が停泊していた。

「私は総司令部にて今後の処遇について話し合ってくるので暫く休んでいてくれ。」

大和の会議室にて山本は皆にそう伝えて下艦した。

基地の入り口に車の用意を終えていた副官の崎水特務少尉は山本が来るのをみてエンジンを掛ける。

「長官はこれからどうなると思いますか？」

「恐らく一度扶桑に艦隊を率いて入港することになるだろう。」

「こちらの世界の人間は歓迎してくれると思いますか？」

「ガリアが解放されたニユースは届いているはずだ。艦隊が入港すればいやでも歓迎をされるよ。」

ロンドンの街並みがいつもよりも綺麗に見える。

「これからガリアも復興に力を入れていきますね。」

「ああ、早く復興してほしいものだ。戦争で傷ついた街も復興すれば何とかなる。だが、失われた命は返ってこない。人は死んでほしくないよ。」

一步間違えれば軍人らしくないと思われるが崎水は山本の気持ちを理解して何も言わなかった。

総司令部の入り口に着き、山本は車から降りる

「崎水君はここで待っていてくれ。」

そう言つて山本は憲兵に敬礼して中に入つていった。

チャーチルの副官のマロニーが逮捕されたため、新たな副官に第一海軍卿のアルフレッド・ダドリー・ピクマン・ロジャーズ・パウンドが任命されていた。

「まず、我々は貴方に謝らなければなりません。マロニーの最初の実験がどうやらあなた方をこの世界に來させてしまったようです。」

「いえいえ、起こつてしまった事は仕方ありません。」

「山本さん、あなた方の支援のおかげでガリアが解放されました。よつて、あなた方は任務から解放されて一度扶桑に艦隊を移動させてください。」

「では、我々は一応扶桑に歓迎されるということですか？」

「ええ、正午にそちらに向かう第一遣欧艦隊と共に扶桑へと向かつてもらいます。」

「了解しました。では、私はこれで。」

山本は振り返って部屋から退出した。外で待っている崎水の車に乗って基地まで帰り。

「我が艦隊は正午に第一遣欧艦隊と共に扶桑へと出港する。」

全艦艇にこの事を伝えて自室に籠った。

正午になり、第一遣欧艦隊が見えた為、艦隊が一斉に出港した。

「全艦。遣欧艦隊に続け。」

第一遣欧艦隊の赤城には宮藤と坂本も扶桑へと帰還のため乗艦していた。

荒波を越えてインド洋に入った。すると、いやな知らせが艦橋に入った。

「南西より台風接近。」

「!。」

「もしや。」

全艦艇の乗組員はあの時と同じだと思った。

「台風は本艦隊に向けて接近中。」

「全艦へ、両舷停止命令を。」

山本の指示を通信士官は発光信号で伝えた。

「坂本さん、台風が近づいているって。」

「心配するな宮藤。赤城が台風なんかで沈んだりしない。」

「でも心配です。」

宮藤は台風が来ることに不安を抱いている。だが、坂本の言うとおり台風なんかで赤城が沈むことなど考えられない。

そして、台風は艦隊を飲み込んだ。その時、坂本は連合艦隊が揺れているのに気が付く。台風による影響ではなく船が曲がって見える。

「何だあれは？」

「坂本さん。船が歪んでいます。」

遣欧艦隊は不審に思い、連合艦隊に無線通信を試みるが

「ダメです。全周波数で試しましたが無線が通じません。」

「どういう事だ？。もう一度試せ。」

通信士官は何度も試すが通じなかった。そうしている間に連合艦隊は消滅した。

「艦隊が消えたぞ。」

「一体何が起こったんだ。」

だが、何処にも連合艦隊は見当たらず、台風も消えていた。遣欧艦隊は連合艦隊の消失を全世界に伝えて扶桑へと帰還した。

「しかし、連合艦隊はどこへ？そして、何故突然台風が消えたのだ？」

赤城の艦長である杉田は連合艦隊の消えた地点を見ながらそう独り言を言った。

その頃、連合艦隊は異次元の中を進んでいた。だが、乗組員は全員意識を失っていて無人航行状態だった。異次元を抜けて、少しずつ目を覚まし始めた。

「いつ、ここは？」

艦橋の窓の外を見ると、見慣れた呉の景色が広がっていた。

「戻ってきたのか？」

「ええ、恐らく我々は戻ってきたのでしょう。」

将兵等は棧橋に歩いていくと、憲兵や守備隊、軍令部総長の永野修身などの軍令部所属将兵などが向かってきた。

「貴様等は一体何処に行っていた？」

永野は怒りぎみに言ってきたが、山本は

「日米開戦は取りやめだ。艦隊の損失が多すぎる。」

「なっ、それはどういう事だ？」

「我々は開戦しないということだ。開戦したければ、陸軍で勝手にやってくれ。」

半分投げ出しぎみに言った。これに陸軍は猛反発したが、海軍なしでは輸送の護衛ができないため渋々承諾した。一部は政府に反旗を起こそうとしたが、天皇が開戦取りやめの命令をした為失敗する。

そして米国に日独伊三国軍事同盟破棄を発表。中国から撤兵を行って講和をし、中国からの石油輸入を本格化した。大英帝国も軍事同盟破棄を確認して日本を支持、石油の輸出を許可した。ソビエト連邦は突然スターリンが失脚し、後任のアドレラ・ヴァンスキーが国家元帥となり、日本への友好条約を結んだ。アメリカに英中ソからの再三に渡る説得を行い、アメリカ国民も日本支持者が増えて親日世論へと傾いていったが、ルーズベルトは断り続ける。それを見た両議院は大統領への失脚文書を提出し、ルーズベルトは失脚。後任の副大統領であったトルーマン大統領は日本の天皇へ直接交渉を行うと要求。これに日本陸軍は反発するが、天皇自らが承認。両国のトップ同士の話し合いで（勿論、双方ともに外務大臣はついてきているが）交渉は成立。続き、アジアの植民地政策は終わりを告げ始めた。ヨーロッパでは戦争が終結。だが、大量の資金を使ってしまった列強は植民地維持すら経済破綻を受けてしまう逆転現象が発生。列強は植民地を手放していった。その為近衛文麿が唱えた大東亜共栄圏は開戦無しで実現することができた。

帰還、そして（後書き）

この話で完結ですが、皆さんの支持次第では今後もストライクウィッチーズを執筆していきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145p/>

異次元、そして

2011年6月13日07時40分発行